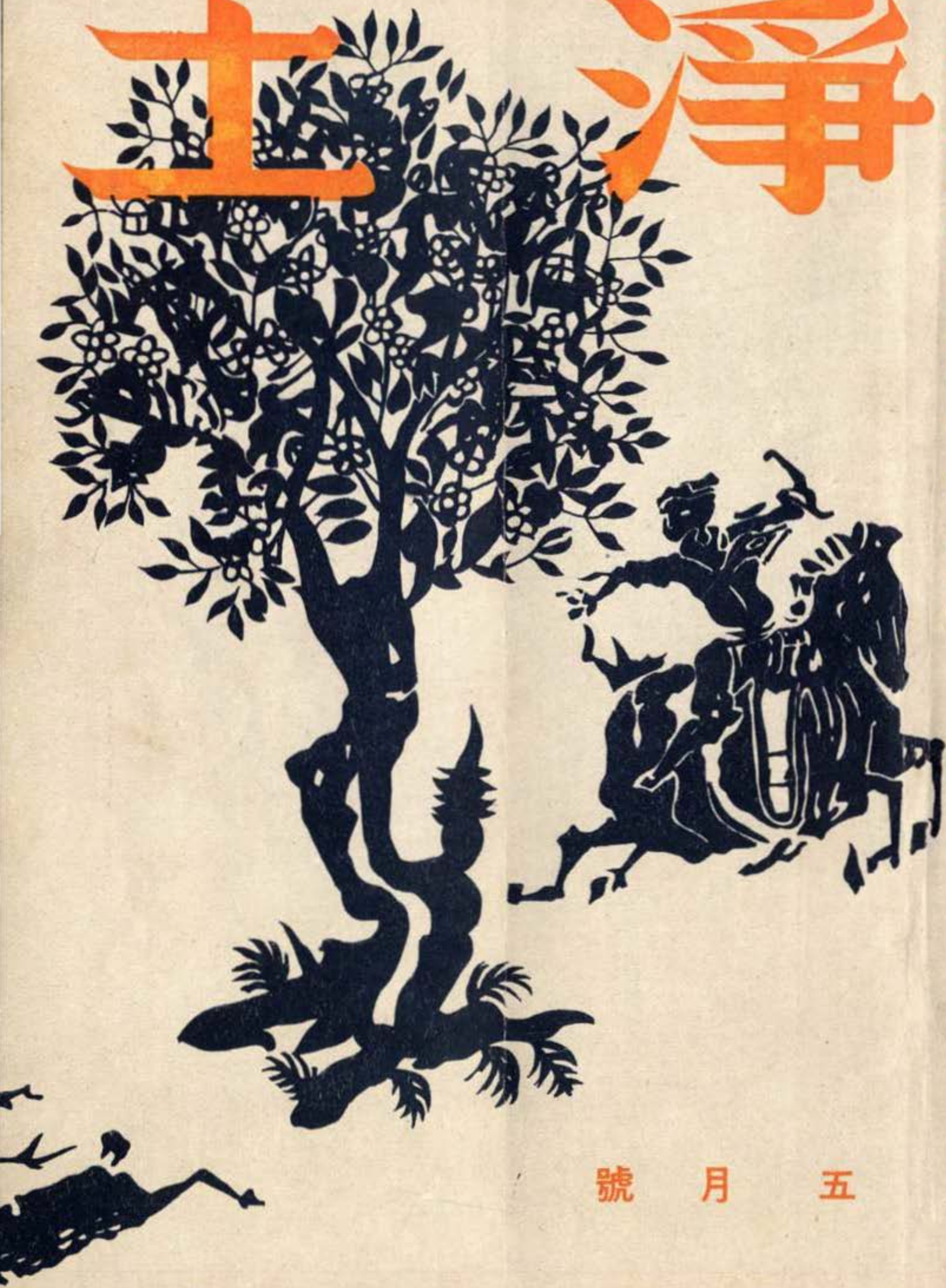


昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十六年四月廿日印刷納本 昭和十六年五月一日發行

第七卷 第五號

淨

土



五 月 號

陸 海 軍
病 院

慰問浄土

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に三ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に七千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十二萬餘冊の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御参加をお願い致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◇一口一圓二十錢の浄財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◇毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◇個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◇御送金は浄土宗務所事務部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

我
が
信
仰

往生郁芳隨圓

念佛
武者小路實篤

懺悔 吉田絃二郎

本願佐藤春夫

知恩院
岡本かの子

文壇の巨星が語る信仰の體驗！

頂は？
法然上人は？
文壇の巨星

が隨筆風に表現された、新鮮な信仰

の言葉は何人の胸にも法悦の燈びを

點ぜずにはおかない！

この内容、この定價！本書こそ布

敎用書の最高峰を行くものである！

四六判二色刷表紙付

定價六錢（送料三錢）

二十部以上一時に購入の方には一部五錢とす。

法然上人鑽仰會編

會仰鑽人上然法・所行發

振東 替京 東芝 京公 二八 一八 八二 七會 館



卷

浄土五月號 目次

表紙…………井上正春

扉・目次カット…………米倉隆從

忘れ得ぬこと…………眞野正順（六）

山上の墓…………吉田絃二郎（二〇）

孝譽上人と春の詩…………石井孝則（四）

弱い子どもたち…………大島徹水（六）

法語 感話 腹の人…………伊藤宏天（四）

浄土建立…………中野尅子（二）

甦つた人の話…………石井英亮（五）



信
仰
相
談
……中村 辨 康・(五)

五月の風(詩)……飯田 光明・(三)
感心しないこと……大垣 生・(八)
大阪誌友會の記……中村 生・(九)
柳 俳 歌
壇……與謝野晶子選・(三)
壇……太田耳動子選・(七)
壇……西島〇丸選・(五)

淨土東西南北……新漫畫隊・(六)

實話遺骨と兵隊……東 慈 道・(四)

小説兜を斬る……湊 邦 三・(六)

先師を語る
福田行誠上人 増谷文雄・(一〇)

法然御房に
物を聽くの會……小西存祐・(六)

會 員 通 信……(五)
編輯後記……(四)

淨土五月號 目次

新發賣

一日一球で健康量

理研製品

肝油を精製した
純ビタミンAD

肝油が効くのはビ
タミンAとDの爲
だと判つてゐる今

日、魚油のまゝの肝油で我慢する必要はあ
りません。本品は肝油から精製抽出したビ
タミンAとDを無味無臭のグロビュール球
に收めた快適な製品——肝油の効果は完全
に数十倍に強化され且快適化されました。

合理的な新製各品

新製合理研ビタミン球は、最近のビタミン學
説に據り、一日二球づゝ服めば完全に生理的
健康量を満たせる様に、一球ビタミンA五千
D一千國際單位を含有させた製品。しかも
青豆ほどの小球です。

一月量 六〇球 二圓

品切の際は總代理店へ

總代理店
株式會社
玉置商店
振替東京七二番



理研 ビタミンAD 球

淨土

五月號

受け難き人身を受なが
ら、むなしく三途に歸
給はんあとは、かなし
みても猶餘あり。歎き
ても又つくべからず。
法然上人御法語





忘^{わす}れ得^えぬこと

…
現^{げん}有^{いう}上^{しやう}人^{にん}と私^{わたし}…

眞 野 正 順

○

もう二十年に近い昔になる。諸方の好意によつて、私の歐洲遊學がやつときまつた春のことであつた。故國を去るにさきだつて、私は、何より先きに、祖山知恩院の廊下にひさまづいてこの行を報告し、また其の頃、近世の名僧として名高い山下現^{げん}有^{いう}上^{しやう}人^{にん}を拜^{はい}してお暇乞^{いひこひ}を申^{まう}上^{しあ}げ

て來やうと春きさらぎの朝、たゞひとり京都の驛を下りた

— 今でこそ、このやうに蒼然として病床に老いてゐる私ではあるが、その頃はまだ潑刺として血の躍り易い白面の青年であつた。ことに久々に宗門から留學生に選ばれたといふ小さな自負心に氣も上すり、今までのザンギリの未だ伸びきらぬ髪の毛を、床屋の親爺が無理に形をつけてくれた頭にべつとりと油を光らし、生れて初めて身につける背廣服の身もこそばゆく、片手をちよつとズボンにさし入れて、祖山の石段を上つてゆく姿は、まことに氣障な若者であつたに相違ない。

どことなく、花片が一つ二つ、風にまじつて降り込んでくるやうな春の朝だつた。ひっそりと静まつた内見所の疊の上に私は坐つて、しばらく、ちつと待つてゐた。やがて、音もなく、間の襖が少し開かれると、赤色の法衣に威儀を正された、老法主が、身體を少し斜にして現はれ、侍僧の手にするやうにして中央の椅子に坐をしめられた。思ひなしか、けふは、その端正な瘦面もどことなく薄ぐろく影がさして、疲れられてゐるやうである。

私はすぐ胸の上に掌を合せて立つて拜禮をしはじめた。法主は瘦せた手をのばして、それを制せられながらやがて私の座に靜まるを待つて、おだやかな眼をしつかりと私の上に注ぎながら、低聲に物言ひはじめられた。『こんど、あなたは、宗門の大切なおつとめに行かれるのですから、どうぞ、しつかり務めて來て下さい：』

頭を垂れながら、ふと私は、なにか調子の異つてゐるやうなものを感した。

こん度の留學に就て、すでに色々な人から激勵の言葉を與へられて來たが、その人等は、大抵、一行つて勉強して

歸つて來てから宗門に盡して呉れ』といふのだが、老法主だけは、行つて勉強すること自體が、すぐ宗門の大切な務めだといふやうに言はれるのである。思へば、宗侶たるかぎり、何時いかなる時いかなる場所も、悉くみな宗門への大切な時と心得ねばならぬ筈である。

それから、法主は少し打解けられたやうに『そう、貴方の御寺の天光院は、淨土宗がはじめて宗學本校を置いた所ですの、して見ると、學問とは、まことに因縁の深いところぢや。私が増上寺に居りました頃には：』と、絲のほぐれるやうに、我寺の觀堂上人の和歌や順戒上人の學事にも言ひ及ばれて、老來すこしも曇ることない綿密な記憶力を以て色々と同舊せられてゐたが、やがてまた聲を改めて『：：：大切なお務であるから：：：』と繰返されて、靜かに座を立たれた。

○

廣間にもどりながら、私は、なにか遠のいてゐた責任が急に身近かに迫つてくるやうに感した。

俯むいて茶菓を戴きながら默然として考へてゐると、そこに常侍の田中俊孝氏が人なつこい笑を満面に湛へながら入つて來られて、手に持った小さな紙包を私の前に置かれて

「これが、あの、御約束の……」

と言はれた。私はあはてゝ頭を下げた。

私は、かねてこの度の外遊中、身につけてゐたいものとして、法主の染筆になる御名號を田中氏を通じて御願ひしておいたのである。押し戴いて披ひて見ると、一葉の小さな絹地に、典雅な筆致で六字の名號が鮮かにしるされてゐる。

——その時である。一枚と思つた染筆の裏から、はらりと私の膝の上に落ちたものがある。拾ひ上げて見ると更にもう一枚の小さな絹地であつて、其上に法主の筆で一聯の詩がしるされてゐるのである。

しばらく、それを默讀してゐたが、私の眼は急に、喰ひつくやうに其上に吸つけられてしまつた。

「家を捨て、髪を別ち、緇衣を着し

水に宿り雲に臥ね、何等の姿

佛祖の遺言、君、細驗せよ

頂を摩で、一日、三思を費せ

感有り、之を同參に與ふ。

華頂山納葵堂」

——びしり、と音がして、突然、春空を裂いて、烈く私の背にあたつたものがある。いまいで、浮き立つてゐたやうな全身の血が、急にどこかへ行つて、冷たいものが背筋をすうつと流れる。私は、眼ばかり大きく見ひらいたまゝ、茫然としてゐた。

忘れてゐたのである。私はわが本性を忘れてゐたのである。この目前の僅かばかりの榮譽に心うばわれ、われら本然の道たる沙門雲水の心を、何處かに置き忘れんとしてゐた。法主の警策はまさに、その喪心を衝いて烈どく鳴つたのである。

「頂を摩で、一日、三思を費せ」

撫でるところか、手のつけやうもなくボマードを塗りたくつてゐる私の頭ではないか。私はじつと深く首をたれた。

法主の舉止はあくまで物靜かに、人に接する態度は、私ら難僧の端にいたるまで慇懃鄭重を極められてゐたがその優しき外貌のつゝむ胸奥には、烈々古聖をしのぐば

かりの道志が火を吐いてゐるのを私は知らなかつた。それが今や、時に激してこの浮薄に流れんとする青僧の肩にするどき一喝となつて襲いかゝつて來たのである。俯向きながら、私は、この時、何がなし熱い熱い師の涙を身感じて來たのである。

○

數日の後、私は船路の人となつた。

そうして、牛津に入りマンチエスターカレッツの今も目に浮ぶ、廣い青芝生につき出した瀟洒たる二階の一室に居を占めると、その壁の上にこの名號の一軸をかけて、その下に朝夕覺束なくも辭書を繰る日を續けたがそれも今は遠い昔の夢となつた。

○

現有上人は、すでに世を去られて久しく、私も、其後いたづらに歳月を重ねて、いまはこの様に空しく病床に老いてゐる。

床上にあをぬけて、頭上を見やると、その壁間にはこの一聯の詩が、いまも昔と變らぬ深嚴なる風貌を以て

私に向つてゐる。

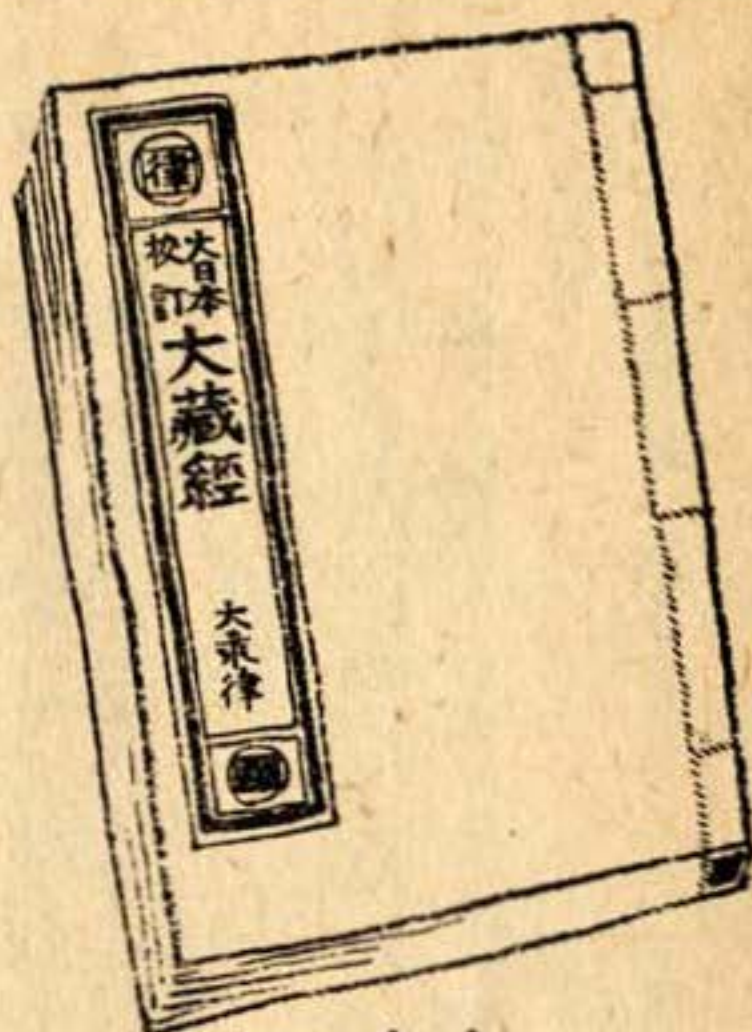
ひとり靜かに眼を瞑れば、往事が歴々として映りかつ消える。かくて遂に、上人の寄託に副ひ得なかつた自分の腑甲斐なさを顧みつゝもなほ、どこか知れぬ甘い慕しさを故師の上に覺えるのである。

(をはり)

降誕佛の御賽錢御寄附

新宿中村屋相馬氏的美舉

新宿の中村屋では昭和三年の花祭り以來毎年花祭り當日には降誕佛を店におうつし申上げ相馬黒光女史の考案になる供物や印度風習をとり入れた捧げ物をする事になつてゐるが、年々禮拜者が激増し本年の花祭りも同様行はれた處あげられたお賽錢が八圓五十五錢にのばつた。この淨財をまとめられて、増上寺の大烏徹水大僧正に託されそつくり本會に御寄附なされたので有難く頂戴した。一昨年の花祭りの時に本會で矢張りこの淨財を頂いたが、その時は一圓四十六錢であつたが一年おいて約六倍に激増した譯で時局窮實に有難いよとであると本部長一同感激してゐる。



先師を語る：3

福田行誠上人

増谷文雄

福田行誠上人は、近代日本の生んだ最も偉大なる、最も高僧らしい高僧であつたと申すことが出来ると思ひます。

私は嘗つて、すこしく明治の佛者のことを調べて、明治高僧傳「一卷を公にしたことがあります、その時、私はつく／＼かなり名僧、高僧を輩出したかに思はれる明治の佛敎界においても、この上人のみは、一きは拔んでた存在であつたことを感じたことでありました。

そのころ、ある人が、この上人を評し、また浄土一宗を評した言葉に、
「宗派を見ず、たゞ行誠一人を見る。」

とありましたが、まさに然りであつたのであります。

明治初年にあつては、佛敎界はまことに、混沌として、また惨憺たるものがありました。佛敎そのものが、浮沈の瀬戸際に立つてゐて、浄土一宗の存在のごときは、何處でどうなつてゐるのか大いに注目するものもなかつた。

その中にあつて、行誠上人の存在のみは、ながく全佛敎、全社會の中にそびえ立つてゐて、まさに、行誠上人の存在あるが故に浄土宗の存在があるとも見ゆる有様であつたのです。

而して、全佛敎界の人々もまた、みなこの上人を呼んで「八宗の泰斗」となしてゐました。混沌として歸すべきところを知らぬ佛敎界の中にあつて、人々が、仰いでもつて歸依處となし、依つてもつて指導者となすべき人物は、まさしく、この上人を措いて

他になかつたのでありました。

この上人の詩に「富士圖」と題する七言絶句がありまして、

八面玲瓏玉放光。全身潔白雪爲装。

凌天一萬三千尺。恰似老僧一寸腸。

と富士の圖に題して

その志を述べてをら

れますが、八面玲瓏と

して、全佛教界の

群峯を眼下に、天

を凌いで聳えたつ

てゐた存在、それ

がこの行誠上人で

あつたのです。

ところで、さて、

この巨大にして八面玲

瓏なる存在を、私の禿

筆をもつて描かんとするに當つて、私は先づ、

この上人のどの面より描きはじめてよいのか、甚だ困るのであり

ます。だが、この上人を深く知る者の言葉によると、この上人は

もと學殖をもつて後來に傳ふべき人物であつたのが、時たま／＼

明治維新、廢佛毀釋の時に遇つたがため、老軀をひつさげて、あ



らゆる難局に當つたのであつて、それはむしろ、この上人御自身にとつては、意外のまわり合せであつただらうとのことでありま

す。では、私も先づ、この上人の學殖のことから書きはじめること

としたいと思います。

二

行誠上人は、武藏國の豐島の生れで、幼にして小石川の無量山傳通院の伴頭寛淳和尚について受戒をなし、佛學の緒に就きましたがやゝ長ずるに及んで、京都に遊學し、嵯峨の隱士立道上人に就いて學を研ぎました。

立道上人は、行誠上人の凡器にあらざるところを知つて、隨分と蘊蓄を傾けて教へるところがありました。行誠上人も、よく努めて、その期待に副ひ、領解練行、頗る得るところあつて、その學佛の基底はこの間において築

かれたやうであります。

だが、その後再び、傳通院に歸來して、更に研學をつゞけました。そのころ、傳通院には、一山の學頭として鸞洲和尚があつて宗學ならびに法相の秘奥を授けてくれました。また、上野の東叡

山淨名院には、慧澄和上といふ方があつて、上人のために、天台

および俱舎の至奥を傾けてくれたのでした。
この慧澄和上といふ方は、天台宗の僧でありましたが、博學ならふものなく、著述數百卷に及び、徳川末期における最大の學僧として、「日本の天台智者大師である。」とまで言はれた方でありました。

『行誡上人全集』の中には、上人の筆による「慧澄和上略傳」といふ一文があるが、それを讀むと、上人がいかにかこの和上に傾倒してをられたか、いかにその學徳の影響をうけられたか、また、この和上に遇ひ得たことをいかに幸ひに思つてをられたかが、眼のあたりに察せられます。

「東大寺の珍海已講は菩提心集の開卷に、世の人は、吉野の花、更したの月見たらんぞ、人に生れし思ひ出なりと言へれど、我は、佛法に逢へるこそ、世に生れたる思ひ出なれとかゝれたり。予行誡は、幸に佛法に逢へる中特にこの和上に逢ひ奉りしを以て、人界に生れたる思ひ出と思ひ侍るになんありける。」



この和上のもとに、行誡上人が往來研學された年月は、いま的確には知ることが出来ないが、随分とながいことであつて、前述の『略傳』の中にも、「來往二里に足らざるを以て、歩馴れ路熟して、隣房を叩くが如くに覺えたりき」と記されてあります。
行誡上人が訪れると、慧澄和上は、いつでも欣然として出で迎へまして、間もなく法談、研學にうつり、時の過ぎるを忘れて、數刻に及ぶことが常であつたのであります。

なほ、この法談、研學に就き、面白くもまたゆかしい珍談であります。慧澄和上は、いつもの癖で、侍者のすすめる茶を、半分ばかり飲みおこして置きます。すると行誡上人は、法談のをりに際し、恭しく拜してそののみ残しのお茶を、頂戴してから歸られたといふこととであります。何とも言へない、師弟の間のことやかな情がこの話の中に味へるやうに思ひます。

三

慧澄和上の學風は、これを後に、渡邊海旭先生が評されて、「都て大體に精通して、煩瑣に關らず、正平を持して説を立て、宏

大もつてその論をなす。」と言つてをられるが、行誠上人の學風もまた、この和上の學風をそのまゝに承けてをられたやうに思はれます。

小さい點にはあまり拘泥しない。

大體を確實に把握することに心掛け

る。奇矯の説を立てる事を嫌つて、堂々

の論をなすことを好む。行誠上人の學風も

またさういふ點に特色があつたと思はれます。

だから、この上人の講義は、つねに鋭さとか、ひら

めきとかが表面に出てゐるわけでないので、うかつに拜聴し

てをると、まるで通俗むきの講義を聞いてゐるやうであるが、さ

て、心を平かにし、靜かに味つてみると、まことに測り知れぬ味

ひと深さとのある講義であつたと申します。

ある時のこと、明治時代の有名な學匠であられた權田雷斧上人

が、行誠上人の遺教經の講義の席に列した後で、つくづく感にう

たれた様子で、人に語つて言つたことがありました。

「自分はへいぜい、行誠上人の講義は通俗的であつて、學者む

きではないと思ひ、そして上人の講義に重きをおいてゐなかつ

たが、今日かうして、この講義の席につらなり、はじめて上人

の學解の深さに驚き入つた次第です。八宗の泰斗と申されるこ



とも、まことに尤もなことであると思ふ。」

四

この上人に對して、ある時、ある人が、
佛教を學ぶについての要領を質問したことがありました。

「我々は、どんな道を學ぶについても、
先づ師表とすべき人物を選ぶことが大切
であると聞いてをりますが、そも／＼上
人が學佛の師表とせられる人物はどなた
でござりませうか。ひとつ、心得のため
にお聞かせ下さいませ。」

すると上人はそれに答へられて申されました。

「予は、佛教を學ぶに就いて、通佛教と淨土宗との二様の見解
を立てて學んで参つたが、その通佛教に就ては、葛城の慈雲尊
者を師といたし、淨土宗については四休庵貞極上人でござる。」
佛教を學ぶに就いて、見解を二様に立てるといふことは、いさ
さか奇異に感ぜられるかも知れないが、これこそ、この上人の年
來の主張であつた「兼學」の主張であることを知らねばなませ
ん。

「兼學」といふのは、昔から言ふところの八宗兼學の「兼學」で

ありまして、簡単に言ふと、僧侶たるものは誰でも、佛教のあらゆる方面の學問を兼ね修さねばならぬ。それでなければ、本當の僧侶にはなれぬ。本當の佛教學は成立せぬとの主張でありまして行誡上人はよく、

「全體、われは天台なれば法相は知らぬとか、禪は禪より外は知らぬなどといふのは、それは佛法ではないのだ。」

といふことを仰せられました。これは、今日にして見れば、別に目新しい主張ではありませんが、徳川末期の極端に宗我宗見の強かつた時代にあつては、かなり尖鋭的な主張であつた許りでなく、また、近代佛教學史の上から見ると、この「兼學」の精神こそは、實に、近代佛教學を一貫した新しい傾向、即ち通佛教學の精神の出發點であつたことが知られるのであります。

五

かゝる學佛の主張をもたれてをられた上人のこととありますので、その學問の用心としては、何よりも先づ、藏經を閱讀すべきことを常に説かれてをられます。

「元祖法然上人は、大藏經を五度まで通覽ありしことなれば、全體を云ふと、一度大藏經を通讀せざるものは、坊主仲間に入ぬほどのことなり。若き人達は、この大藏經を生涯に一度は讀むと極めるべし。」

これは、『行誡上人全集』の中にをさめられてある「學問の用心」といふ一文の中の言葉であります。その他にも、『行誡上人全集』をひもどきますと、或は懇々として大藏經の閱讀をすすめ、或は憤然として今時藏經をよむものすくなきを慨し、或はまた、悠々として、櫻花の春窓、淨机によつて佛書をひもどくの樂しをたゞへるなど、まことに懇切を極めて閱讀のことを奨めてをられるのであります。

だが、ひとくちに閱讀といつても、これはなか／＼容易な業ではありません。一生に一度は大藏經を通讀しないものは、坊主の仲間には這入れぬぞと、この上人は仰せられるが、これが實現は決して容易でないのであります。それでは、どうすればよいかと申すと、別に方法はない。たゞ、護法の念に徹して、佛學に専念するより他はありません。

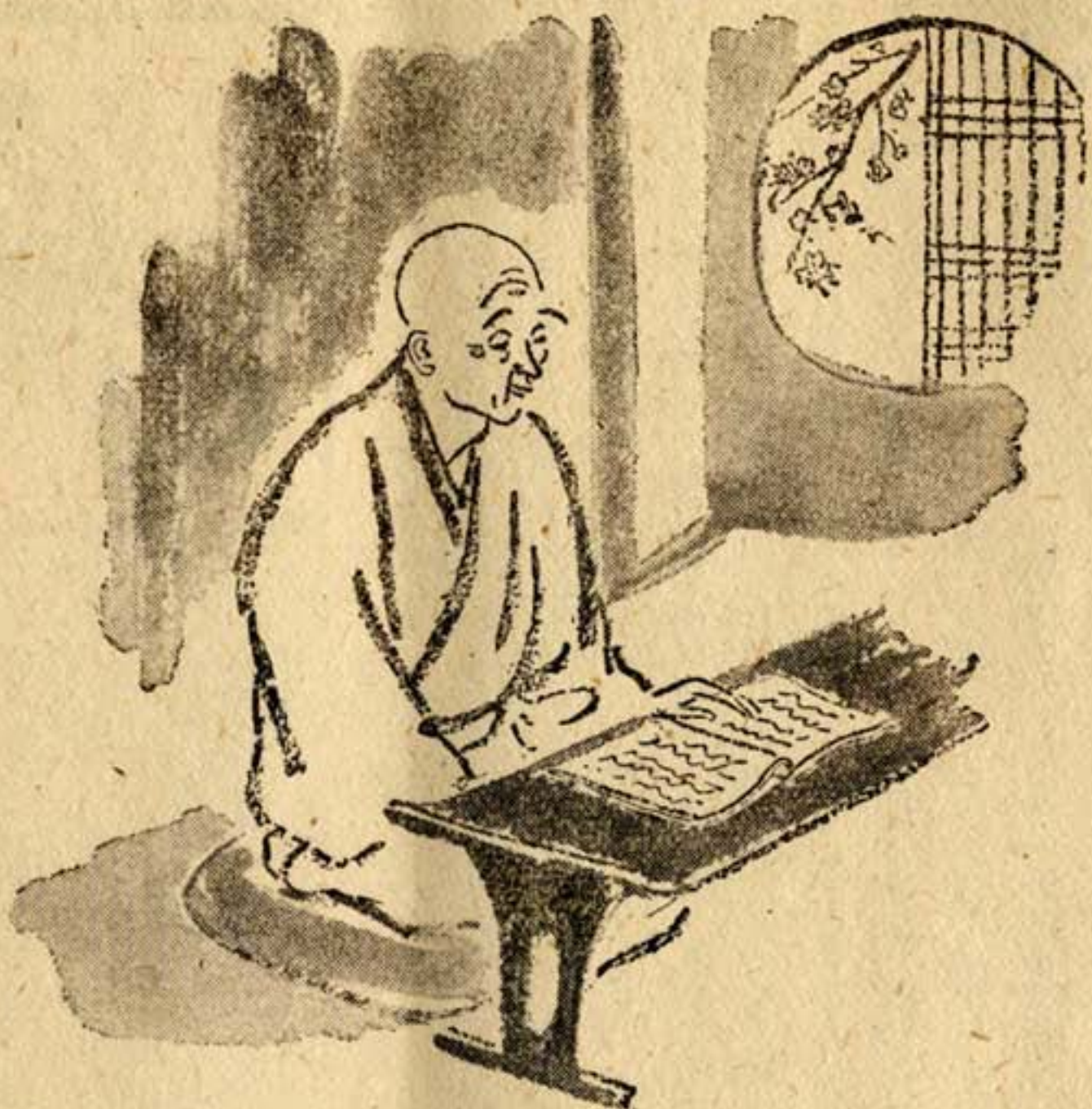
明治廿一年の春、上人が知恩院に在住中にしるされた遺書の中に、つぎのやうな一項があります。

一、扶宗護法の志第一なること、常にみらるゝ通りなり。且とにかく平日なぐさみの様に讀書すべし。

こゝに、學僧としてのこの上人の眞骨頂がうかがへるやうに思はれます。殊に、「平日なぐさみの様に讀書すべし」の一句に、何ともいへない味があるではありませんか。

それに就て思ひ出される話は、この上人がまだ増上寺にをられ

たころ、石村相陰といふ儒者が訪れて参つたことがありました。時あだかも春酣にして、寺内の櫻は爛漫として花咲いてをりましたが、その春風櫻花の中にあつて、上人は靜かに淨机にむかつて、佛書を閱讀せられてゐるところでありました。相陰氏が、挨拶の言葉に、



「今日はまことによいお天氣で……」
と申上げると、上人は、それに答へて、しみじみと仰せられたことでありました。

「今日はまことに好いお天氣で、氣分も自らに清々しい。こんな日に佛前で讀經をしたならば、さだめて有難いことであらうに、老衲をはじめとして、一向に左様な営みもいたさず、佛法の衰へたのも、尤もなことを申さねばなりますまい。」
この時の上人の態度、この時の上人のお言葉。それは相陰氏はのちに人に語つて、つぎのやうに述懐してをります。

「佛者の用心、この一言にして盡せり。およそ世人は、櫻花爛漫のとき、偶々好晴にあへば、心魂すでに天外に馳せて、如是の日、家にあるは惜しむべし。遷上に遊ばんか、東臺に赴かんかと、よく一人の書齋の中に靜坐して、讀書せんとする者なし。況んや、佛前に讀經し、心行を練磨せんとする僧をや。」
この學僧行誡上人に、「大日本校訂大藏經」の刊行（所謂縮刷藏經）といふ大事業があつたことは、まことに當然のことであると申されませう。だが、その事業のことに就いては、筆を改めて述べたいと思ひます。

(つづく)



弱い子どもたち

健康をとり戻した私の体験

増上寺法主 大島 徹水

千葉縣の富浦町に、身體の弱い子供たちのために特につくられた富浦海濱學校といふ學校があります。その校長の和田正系先生は「浄土」の熱心な後援者ですが、去る三月廿七日その學校の講堂で觀音様の開眼式がありました。それは和田先生が毎日子供たちに觀音様をおがませて、佛様に親しませ、身體といつしよに心を丈夫にして行かうと云ふお考へから文展の立派な先生にお願いして造つていただいた觀音様です。兩のお腕に赤ちやんを抱いてゐるお母

様のやうなやさしい觀音様で、慈母觀音といひます。その開眼式、佛様に心を入れる儀式には芝増上寺の御法主、大島徹水大僧正様がとくにお出かけになつて、盛大な式が行はれました。そしてその式の最後に、大僧正様が、その席につらなつた子供達のために、次のやうなお話しをして下さいました。速記ではありませんので、お言葉通りの内容にはなりませんでしたが、たいへんよいお話しであつたので、こゝにのせることにいたしました。大僧正様はお話しを

する前に、「皆さん、私がこれからお念佛を十べん唱へますから、皆さんも手を合せて、私について十べんお念佛を申して下さい」とおつしやつて、その通りになさいますと子供達も一所懸命大僧正様のあとについて十べんお念佛を申しました。それからお話しが始まりました。

◇

私の師匠の紫雲律師と云ふお方は近來の高僧と云はれたお坊さんでありました。その方は道のあるきながらも、日に三巻づゝお經を

讀まれました。その方が日頃云はれるのに、
「私は世の人々のために色々お話しをする
が、私の話しといふものは形であるのにすぎ
ないのだから、たと話を聞くやうなつもりで
私の話をきいてもらつてはこまる。ど
うか私のお話しの精神、その奥にある
こゝろを聞いてもらひたいものだ」

とかうおつしやつてをられました。

私のこのお話しも、どうかさう云ふお
つもりで聞いて頂きたい。

私は晩學でありまして、中學に入つ
たのが明治廿一年、丁度廿一歳の時で
した。普通なれば中學を卒業して高等
學校に入る年ごろです。その年になつ
てやつと名古屋の中學校の一年生にな
りました。ところが、かなしむべし、そ
の年に肺病にかゝつてしまひました。

徴兵検査の時に軍醫さんが、「お前は身體が
たいへんよわつてゐる。お前には大きい聲は
出せまい」と云ひました。が、私は實際はそ
の通りだつたのですが、「大きい聲は出せま

す」とやせがまんをして云ひました。「お前は
よほど身體に氣をつけなければ駄目になつて
しまふぞ」と軍醫さんは重ねて云はれまし
た。それほど私の肺病は悪くなつていたので



す。

それで私は大へんがつかりしてしまひまし
たが、やせ我慢で醫者にもかゝりませんでし
た。喉をはいて見ると血がいつばいさじつて

ゐる。子供心で親に心配をかけてはと云ふや
うなわけで、両親にもかくしてゐました。

暑中休暇に家へ歸つて來ましたが、どうも
矢張り身體の具合が良くない。これはどうせ
生きるか死ぬかだ。醫者にもかゝらず、両親
にも話さず自分一人で一所懸命に考へてゐま
した。そしてかう云ふことを考へた。

師匠の紫雲律師は觀音様を拜んで、そのお
導きであれだけ立派なお坊さんになれた。自
分も佛様のおみちびきでこの病氣を治さう、
暑中休暇の間に治して見せやうとかう考へま
した。

そして朝は毎日早く起きました。寺の門の
まへが一面田で、その門前で竹のくわ箒を持
つて一町程もあるところを一人ですつかり
掃除をします。そして本堂で佛さまを拜んで
おつとめしまして、心から佛さまにお願ひを
いたします。それから師匠の墓のまへに行つ
て朝のあいさつを申上てから、喉を吐いて見
る。夕方になると、寺から十八町もある海岸
へあるいて行つて海水浴をやる。かう云ふこ

と毎日つゞけてやつてみました。その中に
咳の血がなくなりました。

そんなわけで暑中休暇の間にすっかり身體
が治つてしまつたやうな氣がしました。學校
へ歸つてまいりますと、いつも逢ふ文房具屋
のおばさんが、私の顔を見て、びつくりして
たいへん丈夫そうになつたと云つてよろこん
でくれたやうなわけでした。

それからずつと病氣もしませんで、六十八
になつた時に中西博士に健康診斷をしてもら
ひました。六十八にはなつたがまだ大事な仕
事が残つておつたので、すっかり身體をみて
もらひました。その時に流石は名醫だと思ひ
ましたが、私のからだを見まして、

「あんたは廿前後の時に肺病をやつたな。し
かし、今はもう心配はない。たゞ風邪をひい
た時などには氣をつけなさい」と云はれまし
た。つまりその時の治療法ですつかり治つて
しまつたわけです。これはまづたく佛さまの
お導きであると申すよりほかにありません。
かう云ふお話をみなさんにするのは、今日

こゝに觀音様をおまつりすると云ふことゝ、
こゝでからだを養つておられる皆さまとは、
いまもお話し申しましたやうにまことに深い
結び付きがあるからです。たゞ今この觀音様
をおがみまして、實に立派な觀音様であると
感じました。朝夕この觀音様、佛さまをおが
むと云ふことはたゞ仕事や形式ではありませ
ん。佛さまに一心にまなことを注いで、心から
朝夕の禮拜をおこたらぬやうにおすゝめする
次第であります。



かやうに大僧正様はお話しをむすばれまし
て「さあ、みなさん、また私がお念佛を十
邊となへますから、皆さんもそれについて
十べんお念佛を申して下さい」と申されま
すと、子供たちはまへよりも一層まじめに
なつて、大僧正様について、なむあみだぶ
つ、なむあみだぶつとなへました。會衆
のすべてが、それにならつたのでありま
す。

(かはり)

(寫眞は大島徹水師)

感心しないこと

東海道線の朝の列車は例によつて満員でし
た。私も大勢の人達と一緒に坐る席がなくて
通路に立つてゐました。すると或る驛から六
歳位の男の子をつれた婦人が乗つて来て、矢
張り席がないので私のすぐそばに立つてゐま
したが、列車が発車して間もなく中年の男の
人が少し離れた網棚から荷物を降さうと立ち
あがつてゐる隙にその婦人が席に坐つてしま
ひました。それから少したつて又隣りの人が
便所にでも行くのでせう自分の帽子を席に置
いたまゝ席を立ちました。するとその婦人は
膝にかけさせてゐた自分の子供を隣の席の帽
子を隅に押しやりながら坐らせてしまひまし
た。この婦人と子供に席をとられてしまつた
二人の男は別に何も云はず私のそばに立つて
ゐました。私は子供が外の景色をみようと思
ひにしがみつき、その膝の下でもみくちやにさ
れてゐる帽子をみなながら好い氣持はしません
でした。(神奈川大垣生)

大阪誌友會の記

大阪誌友會は去る四月四日午後

七時から天王寺區生玉前町の法音

寺で開催され、熱心な會員四十四

名の出席があり、この會が座談會

に主眼をおいたせいにか「量より質

を」と云ふ感じが強かつた。別け

てもこの會の主催者の一人たる中

易善三郎氏は稀にみる熱心家であ

つた。

會は先づ宮城遙拜、戦役將士英

靈回顧から始まり、「法然上人の人

格と思想」と題する講師講話があ

つて座談會に移り、かくて和やか

な氣分の内に十時半散會した。

この座談會での重なる題目を舉

げると次の如くであつた。

一、法然上人は我が國の神祇に

ついて如何なる考へを持つてゐ

たか。

二、眞宗と淨土宗とは同じく三

部經に依つて立つてゐながら宗

旨が如何う違ふのか。

三、大阪では一心寺や天王寺の

引導鐘があつて僅かなお鳥目で

知人の冥福を祈れるが、東京に

もこんな民衆的な施設があるだ

らうか。

四、關西ではお蠟燭をあげるの

に「お施主なにがし」を貰ねて

くれるが、東京にはそれが無い

のが物足りないやうに思ふ。そ

してこのやうに不足に感じたり

する氣持はいけなひのだらうか

くが、私はそれと同時にこの世に淨土を建設するやう努めなくてはならぬと考へてゐる。また選擇集などに「聖道門を捨て、淨土門に歸する」とあるが、私には逆に「淨土門を知つて初めて聖道門を捨てた」のである。六、和合を中心と思ひながら家人に小言を云ふ場合につひ怒つてしまひ和合が破れることがある。その他いろいろの質問があつたが時間の都合で名残りをおしみつ散會となつた。

因みに中易氏は「淨土」の利用法について中々よくやつて居られる。まづ回覽板で廻して隣組の友達に讀ませるさうである。かなり手間は取るが、雑誌が戻つて來ると今度は戦地の知人に送つてやるとの事である。戦地からは始終喜んで手紙が來るさうである。之は自分がやるばかりでなく、もう既に十組程の隣組が實行して居り、第一線の知人からは「淨土」がまだ來ないか／＼とさいそくして來る状態であるさうである。誠に感謝に堪えないことであり嬉しいことであつた。

また兵庫からわざ／＼水谷と云ふ御婦人が此誌友會に見えられた。中々の熱心家で色々質問したいことと相談したいこともあるが、一度お目にかゝつてからと思つて誌友會の廣告を見て飛んで來たとの事であつた。

會する者は少數ではあつたけれども座談會には適當な數であり且つなごやかなしみりおちついたよい會であつたことは誠に嬉しい極みであつた。

(中村辨康生)



山 上 の 墓

吉 田 絃 二 郎

春の雨が降つてゐる。雲にでもなりさうな寒さである。それでも辛夷も櫻もそれぞれの花を雨に打たせたまゝ靜かに黄昏れてゆく。

じつと夕暮の庭を眺めてゐると、雨に誘はれては土に落ちてゆく白い花片の何となく人の心を惹きつける。人は花の散るのを惜しむ。しかし花自身は散る日を待つてゐたやうにさへ見ゆる。

開くがまゝに開き、匂ふがまゝに匂ひ、散るがまゝに散つてゆく、そして何等の未練をも見せぬ花は尊い悟りの相である。

五十年六十年の苦行精進を通して見出さるゝ悟りも尊い。しかしあるがまゝに生き、あるがまゝに靜かに死んでゆくものゝ悟りも尊い。

×
東京からの來客に田舎振りのもてなしにもと思つて、十二三丁も歩いてあたりの雑木林をくぐり、小川のほとりに土筆を摘んで歸ることにしてゐる。このごろのやうに物資の乏しい時代には客をもてなすにもよい思ひつきだとおもふ。

大抵の客人には椀の中に泛かんだ土筆をこゝろからよろこんでもらへる。しかし稀には土筆だけ、そつくり、椀の片隅に追ひやるやうにして残して行つた人もあつた。人をもてなすことの困難を思ふ。

わたくしは少年のころから蠶豆は皮ごと喰べるとにしてゐる。いつか來客とともに蠶豆を喰べた時何氣なしにいつものやうに皮も喰べてしまつた。そ



れに氣付いた客人は皮ばかりの蠶豆を喰べた。わたくしは氣の毒なことをしたとおもつた。それ以來客人の前では成るべく皮を喰べないことにしてゐる。

數年前の青葉のころ京都に旅したをりのことであつた。夜の食膳に柔かな蠶豆が附いてゐた。膳を下げる時、宿のおかみさんは眼を丸くして「あんたは蠶豆の皮ごと召し上つて」と驚いてゐた。「わたしはいつでも皮ごといたゞくのです」と説明をしてやつた。

翌朝の食膳にも蠶豆が附いてゐた。しかし蠶豆の皮は剥かれてあつた。わたくしは微笑ましい氣になつた。

×
紅葉を眺めに來た友人に何も出すものがないので裏の畑の里芋を掘つて味噌汁を拵へ、茶を點て、客と二人で庭の紅葉を觀た。友人もよろこんでくれた。

「昔は玉蜀黍くらゐで心から客をもてなすことができた。今の時代は客をもてなすにもなか／＼贅澤である」といふ意味の言葉をエマアスンが言つてゐる。

る。わたくしたちの現在の生活はふたゝび玉蜀黍時代に立ちかへつたのである。ありがたいことだと思ふ。

朝五時から八時まで店頭に立ち盡して菓子の一折をもとめて來てくれた友人がある。菓子そのものゝ尊さもさることながら、菓子にこめられた友人の心はさらに尊い。いさゝかの物をいさゝかの物とせずいさゝかの物の裡に無限な心のありがたさを見出すやうになつたのも時勢の力である。昔はたゞ一粒の米をもおろそかにはしなかつた。そのやうな時代が近づいて來た。わたくしはかういふ時代に産まれ合せたことをまことにありがたく思ふ。

×
墓を營む人々は千年の後までも、と思ふて建ててであらう。しかし五百年の墓も稀であり、三百年の墓もめづらしい。何うせ人間は死とともに永久に地上から失はれるものである。

しかし亡き人々のためにできるだけ美しい魂の奥津城を營まうとするのは人間の情として自然のことである。



妻はその夫の墓に、夫はその妻の墓にやがて、自分自分の骨をさしけるであらう。子を失つた母は最後に歸りゆくべき家を、子の墓に見出すであらう。静かな墓地に、妻と並んで記された夫の名を見出す時、愛兒と並んで記された母の名を見出す時、わたくしは涙の底に見出さるゝ人生の幸福を感じないわけにはゆかぬ。

日が暮れても、夜が明けてもたゞ一人である。たま／＼訪れる人たちは「寂しいでせう」となぐさめてくれる。何と答へていゝか自分にもわからな

い。わたくしはこのごろ妻を失つた二人の軍人の話を聞いた。

三人の子を残して妻に先立たれた軍人があつた。かれは三人の子を育てるために、軍職を退いた。その子供たちは「お父さんに揃へてもらつたの」といつて新らしい着物を見せに來ることがある。しかしその子供たちの着物の柄は三十代四十代の人の柄である。

妻に死なれた軍人があつた。かれは通夜のをり紋

付の着物を着たが、襦衣の上に直かに紋付を着てゐた。かれは下着の所在を知らなかつたのであつた。かれは出征した。かれは軍用行李に入れるべき一枚の襦衣についても、施すべき術を知らなかつた。東京の賑かな街を歩いてゐると、誰れも彼れも幸福さうに見えるけれど、妻を失つた男、子を失つた母、夫に先立たれた妻といふやうにいろいろな境遇の人があるにちがひない。

人は毎朝のやうに人の死について聞いてゐる。しかし自分の死の順番についてはあまり考へてゐない。窓の外は花が散つてゐる。わたくしは伊豆の山の墓を想ふ。わたくしは山の墓の後ろに山櫻を植ゑて置いた。昨日今日、大方山櫻の花も墓の上に散つてゐることであらう。今年の春は山の墓の周圍に椿も植ゑてやりたいと思つてゐる。

人々はわたくしの生活を寂しいだらうと問ふ。わたくしは何といつて答ふべきかを知らない。

たゞわたくしは生きてゐて山の墓の周圍に山櫻を植ゑ、椿を植ゑるであらう。

歌壇

與謝野晶子選

高知縣 竹島渡波編

まむかへる鯉のはなや白々と波の

よりつつ夕づく日も

評 雄大莊嚴な景観である海に突き出た鯉の鱗に高く飛沫をあげて磯波がくづれてゐる日は沈みかけて海上に赤やかな紅の色を漂してゐる作者はこなたからのぞんでその美しい景に心を打たれた

東京 八木美樹子

風荒るる街より望む今朝の富士雪

をかづきてさやけかりけり

評 春とは云へば街には時折寒い風が吹き荒れることがある不愉快な突風に見舞はれることもある作者はその風の町を樂しまずに重い足どりで歩いてゐたにちがいないふと遠くの空を見ると豁然とした富士が遠くのものともせずさやかに立つてゐたその秀麗な姿に作者はにはかに氣が引立つて來た

北海道 寺田 賴山

一閑にひとり薫るしらうめ

評 連みとほる寒さに窓々の戸を開け切つて置いたその中に白梅の花が生けてあつた何気なくその室に入ると、梅の香が室一つばいに満つて思はず作者の心をときめかした清新な歌である

大阪府 辻 惣三郎

おしなべてものみな高き世の中に

わが畑作の幸をよろこぶ

栃木縣 大輪 云海

畑中の麥を浸して春の雨やうやく

止めば初蛙鳴く

小樽市 平井 正念

故郷の國のなまりの常會へわれな

つかしく刻を遇しぬ

京都市 望月 久次郎

降り足りし雨の夜明けのしづけさ

に芽ぶかんとする木々は包へり

姫路市 山本美代子

朝の雨しづかに降れる花畑に大き

く小さく芽ふき續けり

高知縣 丸岡 長壽

ふるさとをはるかはなれて荒磯に

鳴とぶ見て旅情しみくる

東京 藤林 貞子

わが心寂しきときは汽車に乗り旅

をしたしと切に思ひぬ

東京 柳 桐子

はるけくも心痛めぬ嚴寒に山のな

りはひはげむ父上

吳海軍病院 寺島 清

明日ありと思はぬために記すてふ

戦友の歌なり美しきかな

長野縣 丸山 力

わが若きます武夫の血の色と日は

曉の海に照り映ゆ

小樽市 中村 茂

下萌えのかすめる野邊をかがやか

に梢は赤く芽吹きけるかも

東京市 八木 澤紅葉

ひたすらに病やしなひ三歳経てわ

が信念はまださだまらず

芝罘 小泉 妙春

奥津城の手入れととのふ今日より

は亡き母の忌のわけてまたるる

埼玉縣 小淵 清秋

よみがへり起つこととしぬあさま

しく生きたんよりも餓死待つよりも

宮崎縣 押川 秀秋

國のため召されし任を果たせよと

君を祈りぬ觀音堂へ

北海道 花田 順佳

人なみに世に立つことを得たる身

も思へば親のめぐみなりけり

東京 吉田 繁子

またとなき母の形見も今日の日に

みくにの爲となるは尊し

鹿児島市 末吉 清澄

此の身をもあなたまかせに越ゆる

とき死出の山路は如何に樂しき

北海道 押野 尚

老先きの短き人の集ひ來て申す念

佛に力こもれり

滋賀縣 重野 ふみ子

のどかなる春の野に立ち思ふかな

卯月八日はあと幾日と

宮城下の學校に御成りを明日に迎へて

光榮の日を明日にして學舎を掃き

清めつつ心ときめく

中支派遣軍 湯原 弘道

みいくさに會ふよろこびの大きか

り君逝きし後世のはかなくて

東京 三野 輪幸節

幼児もスキーをつけて雪すべる越

後路ゆけば鳶のまひ居り

京都 福島 孝治郎

病む人に一入心寄せにけりおのが

臥したるむかし偲びて

静岡県 一向 山人

春の雨われ山寺に慈なくあれよと

祈る現地の弟

京都市 永田 七郎

先生も父兄も子等も今日の日を喜

びに満ちしはし聲なし

投稿規定

はがきに一回二首以内とし
「淨土」編輯歌壇係あてに
送ること



立 建 土 淨

子 尅 野 中

私は昨日まで、村松せんと云ふ方の處に居りました。

○

此の方は、生花のお師匠さんで、家中どこへ行つても華が生けてある。佛前は勿論、床の間、書齋、食卓、廊下櫓子段、便所の中、湯殿、洗面所、炊事場……等、ドコへ行つて

も花だらけです。非常にお花が好き、掛花、投入れ、盛花等、其處々に懸けて、實に種々雑多な花が家中に充滿してゐる。本當に面白いことだ、賑やかなことだ、美しい事だ、つくづく感心しました。

ドコへ行つても花と話が出来る。花も家族の一人です。だから人間もニコ／＼、花もニコ／＼です。麗はしいこと、たのしいこと、本當に花と一體となり、花と共同生活せなくては、花も生からぬ、花も挿せぬのだと思ひます。

花を手の先きで弄ぶのでなく、花とたのしく暮す、花と遊び、花と友達となり、花と兄弟となり、花と手をとつて仲よく生きるのではなくては、花の心もわからぬし、花を活かし、花を生けることにもならぬのでせう。

本當にドコへ行つても、花がニコ／＼と話しかけて来るように感ずる美しい家庭です。而かもよく見ると、そのお花が決して贅澤な花でなく、ホンの有り合せの華が無理なく、無難作にドコにも配置してあるのであつて、

一杯々々變つた花が珍らしく、これ見よがしに誇りがましく活けてあるのとは違ふ。手に入つた花が仲よく、アチラにもコチラにも分けられて同じ花で何杯も生けてあると云つた方がいゝのです。だから家中の花が皆兄弟で、如何にもアチラにもコチラにも同じ顔をしてゐる、たゞ一寸、花が大きい小さいか、形が寝てゐるか、立つてゐるかの違ひです。

○

生花の方から云つたら、こんな同じ材料で幾杯も生けることはいけない事かも知らぬがそこに少しも、自慢氣も贅澤氣もなく、お金に飽かさず、珍花、名花を揃へたのとは違ふ、如何にも親しみの深い、なつかし味の深い感じがします、これが本當の「華道」でないかと、獨り秘かに想像して見ました。

花が、同じ、水仙や、梅もどき、千兩、菊などばかりで、何の妙もないと云ふ人もあるかわからぬが、私は其の同じ花で活けてある

から嬉しく思つたのです。大きい立派な花は立派な花で佛前へ行く、床の前へ坐る。小さい花、姿勢の悪い花は、姿勢が悪いから懸花になる。折れ枝や下枝のような頭だけの花は一輪挿になる。食卓花になる等、それ／＼手分けして部署に就いてゐるような氣がして、花の兄弟が總動員で家中を飾り立て、守つてゐるように思はれました。

特に氣の毒なのは、便所の中へ納まつて、便所の中で坐つてゐる花です。コレは同じ兄妹でも、一番、可哀相な、割の悪い役のように見えました。而しコレも便所の中へ這入つて、ジーと其顔を見てゐると決して泣顔はして居らぬ、ニコ／＼笑つてゐる。此の花が一番偉い、一番尊いのぢやないかと思へて來ました。

○

他の者の嫌ふキタナイ處、臭い處へ自ら舞ひ下つて、他の者の代りに「ココは私が守らして貰ひませう——」

「ココは私が引受けた——」

「ココで私は精一杯働くのだ！」

と、勇敢に、暗い、臭い便所の中で、力一杯美しく咲き通す……。ソレが一番美しいのぢやないでせうか。他の困難に代つて自ら困難に就く——それが一番愉快ぢやないでせうか。人を樂さして自分が一番骨折るソレが損のようでは一番得をする、喜びではないでせうか。他の者が苦しんでゐるのを見て、自分だけがラクをしてゐてもソレは決してたのしみにはならぬ。寧ろ、自分が皆に代つて一番苦勞を背負ふ時、眞の悦びがあるのです。

飲めば益々

元氣旺盛

無臭（にんにく粉末）コナワサド

特約店大募集中

静岡市上香谷町

神谷昌孝

電話二八六三番
振替東京一四六五一番

人は不成功者と氣の毒がわかるからぬ。人は日蔭者と囁ふかわからぬが、笑はれてもいい、ほめられてもいい、自分としては「活きる天地」を見出し、「活かしめらるゝ天地の心」を感じて雄々しく立上る時、一番幸福な

笑 話

(星薄謝)

水 酒

凸「いまのお酒には金魚が平氣で泳ぐんださうだよ……」

凹「ほう、それで金魚が赤いのだね」

(三條市寺町 春助)

ぜっかちな友人

せっかちな友人が私のところに息せききつて馳けつけて云ひました。

「いまお宅に電報を打つてお知らせしたのですがね、電報では間に合はないといけませんので、自身やつて来ました。ところでお宅の電話は何番でしたかね、用事はお電話でお知らせすれば間に合ふでせうね。」

(東京市 太田勇)

です、一番尊いのです。

○

一本のローソクでも火を點すれば、あんなに内から「光り」を發するぢやありませんか。一つの炭でも火をつければ、あんなに暖い熱を内より發する。あれは「天地の力」が「光り」となり、「熱」となつて自己の裡より發して下さるのです。だから一本の花と雖も「天地の力」で咲いてゐるのです。咲かされてゐるのです。「咲かされてゐること」を知つた時、自ら堂々と恥づる色なく咲いて行ける——コレが本當に「生きる悦び」です。自分は一寸の花でも、實は天地の大をなしてゐるもので、天地の意志を代表し、天地の總力を表象してゐる、謂はゞ富士山のやうに莊大で尊嚴なるものだと思はれます。自分はドコで咲いてゐても天地を莊嚴し、天地一切を救つてゐるのだと感じます。自分の存在は宇宙的存在で、天下の國寶だと感じられて來ていゝ、社會的地位はどう見られて

ゐようと、自分として間違ひの無い、尊い働きをしてゐると思はれて來ねばいかぬ。するともう、自分が便所の番をしてゐるとか、他の者ばかりが床ノ間や、お坐敷に坐つてゐて、威張つてやがるから癪にさわるなどと、不平に思つたり羨んだりする氣持がない。いつも居る處が『淨土』で、周りが汚ければ「自分の光」で淨めてやる——といふ位の元氣がいつも湧きます。だから、いつも周圍から極樂にし、自分を「往生」さして行く。一步／＼が自信に充ちた、救はれに充ちた躍進です。創造です。

○

淨土は、人に造つて貰つて、人に造つて貰つた極樂へコソソリ、入り込むような借家住ひではないのです。如來様のみ力とみ恵を頂いて、自分が一步步々建設して行く——恰度煉瓦を一丁づゝ積み上げて大ビルディングを建て上げるやうに努力することです。これが眞實生活であり、信仰生活であります。



日くるれば別の寒さが来りけり

評 日中も恐らく相違事かつたことであらう。それが日没とともに非常な寒さに變つて了つた。それを「別な寒さ」としたのである。此の表現が利いてゐる

激賞 藤田主郎 重野ふみ子

紫雲英つむ所なく一面に

評 何處から舞んでよろしいか、わからないう位咲き盛つてゐる紫雲英が想像せられる。中七字が効果をあげてゐる。

大分縣 石堂柑山生

白魚に細敷く女ばかりにて

評 此の女達たちは何れも通商の妻や子であらうが「白魚」のことから何か隠しさを思ひ起さしめて呉れる。

米子市 宮本盛雄

御手もて枕し給ふ寝纏廻かな

評 寝纏廻の胸裸に月のひかりかな

東京市 森田法晃

枯木かげうすれゆくなり石垣に

試賀縣 安藤正生

懐手して見る彼岸櫻かな

薄氷隔てゝ梅と金魚かな

激賞 北野勇次

黒土を割つて間もなき土筆かな

青森市 高松平助

煩悩を棄てゝ彼岸の列にある

激賞 重野ふみ子

あけくれを花の下なる我が家かな

鳥取縣 林良碩

春浅し岸壁をもる水の音

静岡縣 水野法子

庭に佇ちてすこしぬれたる春の雨

東京市 渡邊一念

早春や渡船の水尾の枯蘆に

福岡縣 山田信念

春市や萬才も来てめでたけれ

東京市 田中敬郎

川の間陽をいつばいに水溜む

京都市 六田七

春浅くまだ解けきらぬ氷かな

京都市 浅井まさ子

香煙の重けなりけり春の雨

北海通 花田順往

新しき下駄の輕ろしも春の道

小樽市 西田喜年

堤行く人の映りて春の水

名古屋 堀田眞吉

木枯に吹きさらされし汽笛かな

京都市 堀島孝治郎

初日影彼我の差別はなかりけり

鳥取縣 井澤雲堂

講堂に全女生徒の針祭

米子市 宮富女

法悦の身はかく安し煙を打つ

近江國 豊田千代子

爆竹の去つて梅の香亦静か

雲川縣 日向法圓

隙間風防がんものと勞せしに

會津縣 藤田智國

畦の子は汽車に萬歳風は春

奈良縣 前田智國

菜畑の眞黄色なる車窓かな

京都市 永田七郎

雨に來て雨に歸りぬ花の旅

京都市 永田七郎

川柳ゆれては走る雪解水

東京縣 名草

菜を洗ふ舟の女に水清し

激賞 佐和

春雨に風呂のおもひは仄かなり

大和丹波市 寺田定信

落の臺摘めば亡師の偲ばるゝ

激賞 美船美佐緒

又どつと臥り給ひぬ梅の花

名古屋 堀島典雄

寒の月山を照して肌さむし

兵庫縣 山本賢成

春光は地に遍し力湧く

岩田市 長岡白朝

杉丸に川埋れて寒の月

川崎市 深瀬益吉

松の葉に露光らせて朝来る

名古屋 堀島芳月

湯の宿に遠き蛙をきく夜かな

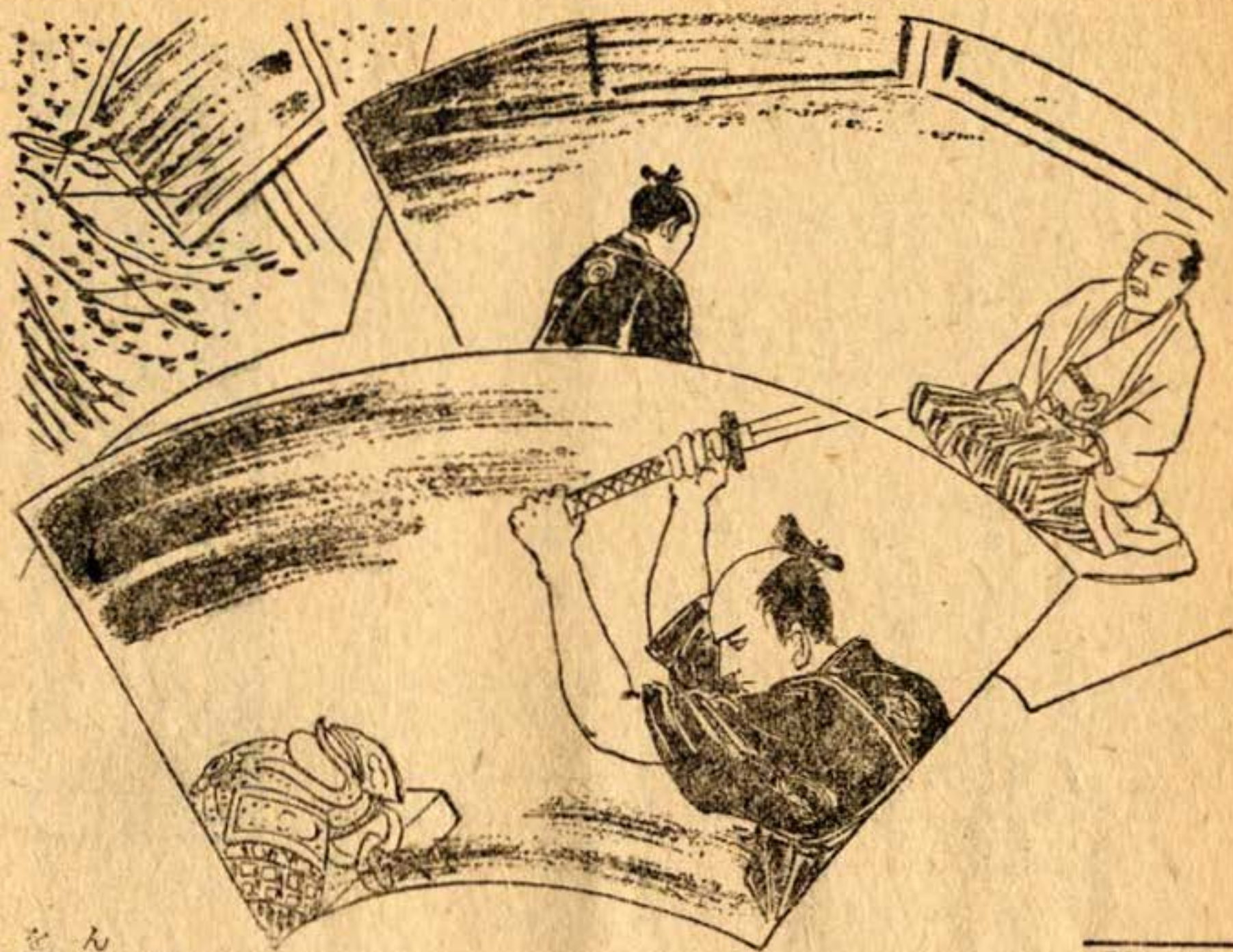
栃木縣 大崎云海

歸る千鳥連の霞みのくるゝ頃

大阪市 辻たき

投稿規定

官製はがきに一回二句以内とし「淨土」編輯部併係あてに送ること。



説 小

兜を斬る

— 劍豪 榊原

鍵吉傳

湊 邦 三

鈴木 金平 畫

(一)

腹が立つが、勝てないのだから、仕方がない。仕方がないが、どうも困る……。

江戸麻布狸穴町にある直心影流男谷精一郎の道場で、永年の稽古を積んで切紙、初段、目録を経て免許を許されてある人々が、榊原鍵吉の顔を見ると、何となく憂鬱になります。

道場に掲げられてゐる名札では、切紙すら貰へてゐない榊原健吉よりは遙に上位にあるのですが、竹刀をとつて立向つては、どうしても勝てません。

その癖、道場で、榊原健吉に提つて、『御稽古をお願いいたします。』

上位にある者への禮儀を忘れないで、腰を低く言葉づかひも丁寧に頼まれては、嫌だとはいへません。

ことに、番町に住んでゐる大森の旗本落合源三郎のやうに、腕も立つのだが、早く名を取りたい、切紙、初段、目録、免許を早く取つて、身の飾りにしたいといった氣持のある連中にとつては、一番嫌な相手です。

『落合氏……』

榊原健吉に聲をかけられると、胸がドキツ！と鳴つて、顔色が変わります。

『へ、へ、折角であるが、今日は、來客の爲に、稽古を早く切上げるで、悪しからず……』

落合源三郎は二度まで、その策で逃げましたが、今日は三度目、卑怯といはれ逃げたと

いはれたくはないから、流石に、その策が使へませんでした。

それでも彼は、澁面をつくつて、

『この二、三日、身體具合が悪うて……』

打込まれた時の豫防線を張りながら、今迄は色艶の良かった顔を俄に曇らして、稽古道具を付けると、三尺八寸の竹刀を握つて立ちましたが、身體が微に顫えるのをどうすることも出来ません。

それは、かうした連中に限つて、負惜みが強い。勝敗は別にして、自分に備つてゐるだけの力、業……それを傾けつくして太刀打ちすれば、負けても立派なのに、

(目録の腕で、切紙すらも取つてゐない、榊原ごときにも負けては……)

劍道といふものが、窮極は人間修業であるといふ、高い精神を忘れて、何でも彼でも勝たうとするから、構へにも、呼吸にも、業にも、無理を生じて見苦しい負方をします。

『いざ！』

『いざ！』

廣い道場の一角で、落合源三郎は榊原健吉と目録を交すと、一刀三尺の間合をとつて、颯と竹刀を青眼に構へ、途端に、

『えいッ』

叩付けるやうな聲を發しました。

劍道では、聲で勝負を自分のものにすることはあります。

千葉周作の北辰一刀流でいふ三聲……勝を敵に知らす聲、敵の業を見破つた時の聲、敵を追込んだ時に、敵を畏縮させる聲……が、それでこれは北辰一刀流だけではなく、何流でも、腕が出来れば場合に應じ機に臨んで、自然に發する聲なのです。

しかし、今の、落合源三郎の聲は不可せん。

激しく聲を浴せて、相手の氣を挫くつもりであつても、その實は、相手を畏怖するあまりに、心の脅えが姿を變へて、虚勢になつた聲です。静かに眺めてゐた男谷静一郎の穏かな眼の内に、落合源三郎の敗北を決定した微笑が浮び上りました。

果して、榊原健吉は竹刀を下段に構へて動かず、激しく浴せてきた聲にも、切先を揺つてきた誘ひにも乗りませんでした。

そして勝負を焦慮つた源三郎が、竹刀を青眼に構へたまふで、ダツ！と踏出し、諸手で突きを入れやうと考へた、それを見破つた彼は、劍道でいふ隆頭を打つ……相手が業に移らうとする前の一瞬に叩く氣で、パツと竹刀を振上げやうとした刹那でした。

『榊原、待て——。』

低いが凛と響く聲がして、見れば、師匠の男谷精一郎が微笑を含んで立つてゐました。

『試合中であるが、汝に話がある。』

『はつ……。』

健吉が靜かに竹刀を引いて落合源三郎に慇懃に

目禮

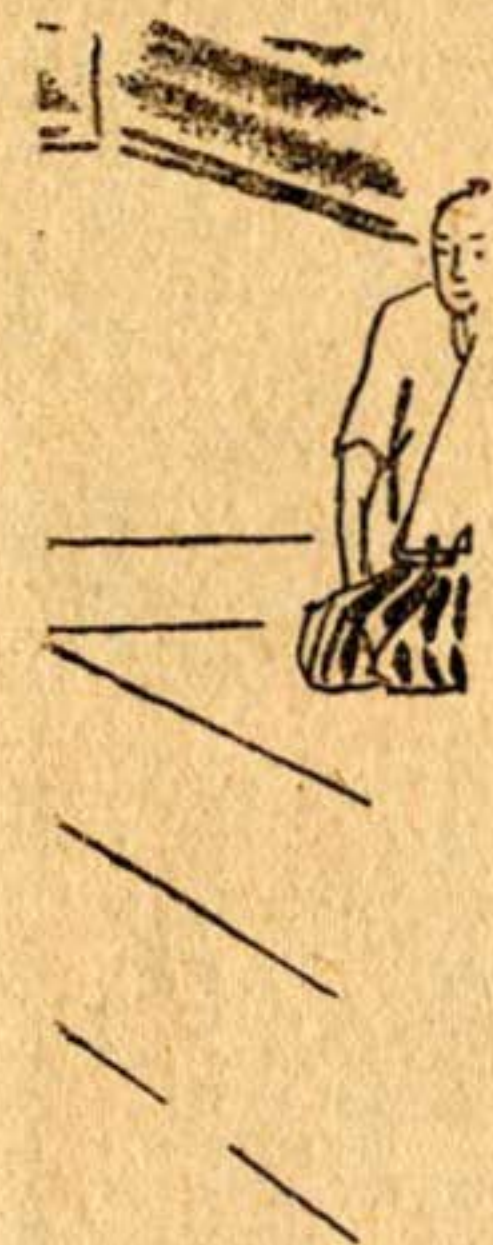
して

師匠

の後

から

から



行つてしまふと、源三郎は眼が眩む思ひで、竹刀を杖にしてはつとなりました。

(二)

『免許を取つたから、強いのではなく、強いから免許が許される。免許を許されるほどの腕であれば、免許を許されなくも、強いには違ひない……。』

男谷精一郎は居間へ入つて、榊原健吉と向合つて坐ると、謎めいたことをいひはじめました。

正面床間には書籍が堆高く積んであり、達棚にも繪筆、繪具、繪絹などが見えて、この居間には、世間でよく見る劍客の殺伐な感じが少しもありません。

文化七年に男谷友之丞の長男に生れて、二十歳の時に、小十人組男谷彦四郎の養子となつた男谷精一郎信友は、劍を直心影流に、槍を寶藏院流に、兵法を平山行藏に學んで、文學を嗜み書畫をよくして、暇々には繪絹を伸べて、山水を描き花鳥を描きます。

武藝修業は人間修業、劍は心、精神の糧となる讀書を怠らない人物ですから、一瞬の勝負にのみ重きを置く、視野の狭い劍客とは、居間の感じからして違ひます。

『榊原、汝には、今迄に免許を許さうと、わしは二度いつたな』

『はつ……。』

『その度に、汝は辭退した。』

榊原健吉は顔を赧らめて項垂れました。

『己の腕のほども知らないで、免許を取らうとばかり希ふ者の多い中に、師匠から勧められて、なほ辭退する汝を、わしは奥床しいと思つた。』

『はつ……。』

健吉は顔を伏せて、いよく身體を硬く

し。ま。す。『實。力。が。備。は。れ。ば。名。は。自。然。に、取。れ。る。も。の。で。今。日。男。谷。の。道。場。で。汝。を。免。許。以。下。の。腕。』
と思つてゐる者は、一人もあるまい。ハ、ハ、しかしちや。道場を開いても多數の門人



を取立て、行く爲には、その間に、自から政
策のあるもので、切紙といひ初段といひ目
録、免許の段階が設けてあるのは、修業する
者に、手近いところに段階を置いて希望を持
たせ、一段々踏上らせながら、何時の間に
か、武道の高い精神に迫らせやう爲で、決
して無用の段階が設けてあるわけではない。
そこで、汝が何時までも、その段階を踏んで
くれぬと、この道場の秩序が保てぬで、わし
は尋ねる。何故に、汝は免許を取らうとせぬ
のちや。』

男谷精一郎が條理をつくして説く言葉を、
榊原健吉は深く項垂れて聞いてゐましたが、

『先生、申しわけございません。』

火が點いたやう眞鍮になつた顔を上げてい
ひました。

『實は、家が貧しくて、免許を頂く餘裕がな
いのでございます。』

師匠から免許を許された時は、本金一枚を
師匠に贈つて、師匠や先輩を招いて祝宴を開
き饗應するのが、當時の慣例だつたのです。

榊原健吉は麻布廣尾に住んでゐる幕臣榊原益太郎の長男に生まれましたが、小祿の上に兄弟が多くて、家が貧しい爲に、それが出来な

いでゐたのです。

『ハ、ハ、ハ……』

男谷精一郎は晴れくと笑ひました。

數百を算へる門人の中でも、人物技倆ともに一頭地を抜いてゐて、その成長に多大の期待をかけてゐた健吉が、他の理由でなく、家

が貧しい爲に免許を取ら

うとしなかつたと聞いて心を軽くしたのでした。

『よし／＼では一切をわしに委せるがよい。明日

は免許の式を擧げるでそのつもりであてくれ。そ

れならば早く打開してくればわしも心配せずに

済んだのだ。ハ、ハ、

ハ、よかつた／＼。』

その日、男谷精一郎が

門人達に、明日、榊原健吉に對して免許皆傳の式を擧げると披露しますと、今迄、健吉の顔を見ると憂鬱だつた連中が、大歡ひしました。

『それは、目出度い！』

『やれ／＼、ほつとしたよ！』

『ハ、ハ、目の上の瘤が取れて、明日からは清々するな。』

『一つ、われ／＼も重荷を下した祝ひをするか。』

『ハ、ハ、ハハハ……』
大祿の旗本落合源三郎の如きは、榊原健吉に代つて自分が披露の祝宴を開かうとまで、師匠の男谷精一郎に申出ました。

(三)

慶應四年——明治元年——の五月十四日の夜でした。

下谷車坂に道場を開いてゐた榊原健吉は、手を叩いて門人を居間へ呼びました。

『表が騒がしい。それに、上野の方で、鯨波が擧つてゐるやうな氣がする。見てきてくれ。』

『はつ……』

門人の一正が駆出して行きますと、二、三日、この道場へ詰切つてゐる門人達が殺氣立ちました。

『いよく、薩長を相手にや



るのだな。」

『上野だ、上野へ行つて』

彰義隊に加はるのだ！』

『片ッ端から斬るぞ！』

安政二年に幕府が講武

所を設けますと男谷精一

郎は頭取兼教授方に、榎

原健吉は教授方に任命さ

れました。

講武所は嶮しさを加へ

る時勢に備へて、幕府が

旗本の二、三男を集め

て、武藝を教へる爲に出

来たものです。

續いて安政五年に、徳川家茂が紀州から入

つて將軍職になると、軍制の改革があつて、

歩兵、騎兵、砲兵の三隊が常備として新に設

けられ、それが將軍の近衛となつたので、健

吉は三橋虎藏、井上八郎、今堀登代太郎、近

藤綱之助等と、その師範役となり、二ノ丸御

留守居格で三百俵、朱塗の槍を立てゝ登城す



る身分となりました。

勿論、師匠の男谷精一郎が推挙した爲でも

あるが、貧しい父に迷惑をかけては——と思

つて、何時までも名を取らうとしなかつた、

男谷の道場にゐた頃からの朴訥正直さが重く

用ひられたのです。

ことに、徳川家茂には氣に入りで、京都上

洛の時は、身邊守護に供をし

て傍から放されなかつた位あ

ですから、蛤門の變から長

州征伐となり、徳川慶喜の大

政奉還から、急轉して鳥羽伏

見の戦ひとなり、今年の四月

に江戸城を官軍が收めると、

徳川家の祿を食んでゐた人々

が、彰義隊を組織して、上野

へ立籠つて、一戦交へること

になり、その人達が、幾度も

く、参加を勧めにくると、

門人達は師匠の榎原健吉が、

當然、彰義隊に加はるものと

思つてゐたのです。

『先生／＼ッ、上野では、合戦の準備が始つ

て居ります！』

騒がしい表を見にやつた門人が、息急切つ

て戻戻つてくると、榎原健吉は門人達に諸道

具の取片付けを命じて、自分は身仕度にかか

りました。

『門人衆、生死は共にしよう。その代り、わしの指揮に叛いてはならぬぞ!』

夜明けが近い頃に、榊原鍵吉は嚴重に戸締りした道場を棄て、上野をめざしました。

勿論、上野の森には、赫々と篝火が燃えてゐて、要所々々を守る彰義隊の者で蟻の這入る隙間もありません。

しかし、榊原鍵吉が立塞つた者に、

『下谷、車坂の、榊原だ!』

と名乗ると、彰義隊の者は雀躍りして通します。

『おおッ、榊原先生だ!』

『車坂の先生が匠付けて下すつたぞ!』

『へ、へ、直心影流の凄く殺陣が見られる!』

榊原鍵吉が上野の森の守りの線を突破して、奥深く進んで行く内に、股々と砲聲が轟

きはじめました。

黒門口、坂本口、谷中の三方から、砲聲

を響いて、官軍が進撃を開始して、湯島臺、

彌生岡、黒門口に据ゑられてゐた大砲が、一

齊に、火蓋を切つたのです。

『先生!』、黒門口が破れさうだといつて居ります!』

寛永寺へ近づいて行くと、攻める官軍が、

それとも彰義隊か、怒濤のやうに鯨波が起つ

て、銃聲や砲聲が森を震はしてゐる中を、血

に染つて引揚げてくる彰義隊の者に形勢を聞

いた門人達の中には、何の方面へ向へば良い

のか、何處で、官軍と闘ふのか、心に迷ひを

生じてさういふ者もありましたが、榊原鍵吉

は寛永寺を目ざして脇目を振りません。

彼は大義名分を知つてゐる……。

永年、徳川家の祿を食み、恩顧を蒙つてき

たが、しかし、日本人である以上は、天朝に

弓が引けるものでない。

將軍徳川慶喜は既に大政を奉還して、今は

水戸に退隠して居り、江戸城は官軍の手に渡

されてゐる今は、自分に残されてゐるものは

上野の宮家を守護し奉るより他にない。

『騒ぐな!』、わしの指揮に従へ!』

榊原鍵吉は寛永寺に飛込むと、家徒に御姿

を變へさせられた宮家を背負ひ參らせて、前

後を門人達に警護させながら、上野を落ち

て、三河島へお供しました。

明治二十年の菊薫る十一月十一日――。

榊原鍵吉は、伏見宮殿下の御邸で、胴田貫

の一刀を眞向に振冠つてゐました。

主上の行幸があつて、今日は兜割りを天覽

にお供へ申上げる日、鹿島明神を禱りなが

ら、齋戒沐浴して、この日を待つてゐた彼

は、五十八歳の老齡に近い歳ながら、徳川末

期から明治初年へかけて、劍豪の名を謳はれ

ただけあつて、嬰鏢たる體軀です。

鍵吉の小波のやうな皺を曳いてゐる兩眼が

注がれてゐるところには、明珠鏢の南蠻鏢

桃形の兜が、既に、當時、有名だつた劍客の

逸見宗助、上田右馬之允の太刀先を跳返して

素知らぬ顔でゐます。

『えいッ!』

水を打つた静けさを破つて、鍵吉の裂帛の

叫聲が起つた時、白刃一閃、ハツと覗込む人

人の眼の前で、胴田貫の一刀はガッ!と音を

立て、兜に喰入ること、三寸五分でした。(完)



王子圖 三野輪幸節

寡黙なる自分となつて櫻咲く

評 今回集まつた中での秀逸です、判つて貰へぬ自分をチツと抱いて春に對する一種の感傷、詩を解するものの持つ花をうなづかす心。

鳥山町 大輪 清

部屋暗く静もり深き夜半の宿

評 夜の底にある自分、幾多のわき上る感の渦の中に自分を見出して、夜のしじまをチツと心に噛みしめるとき、覺者の道を仄かに見うるが如き心も起さる。

新木 萬壽 云海

子の泣くを矯めてかなしき母の胸

評 泣くのはや無いよといつてゐる方が先へ泣いてゐる親心と翻譯したくなる句、私はドコの會へ出ても必ず母の句を作ると、私の選には必ず母の句があると、いつもからかはれるが、どうしても母の句には心をひかれる。乞御容。

静岡縣 水野 藤花

虫喰ひの林檎頬張るわれとなり

評 只それだけの句だといへば、それだけだが、チツと見て居ると自嘲の中に見通がし得ぬ。あるものがある事を看取し得る。

於會根町 平井 正念

賤が伏屋にこの日あり出征旗

評 大君のために命捧げぬと勇みたつ姿、いふせき小屋に咲く梅のことすら驚る心地ぞせらるゝ。

福山市 佐藤 日堂

病み上り蜘蛛の集ジツト見つめて

評 蜘蛛の營みへ目を据へて居る病上りまどろこしくなる自分、或種の焦燥をこまでを感じたい。

福岡 丸山 千鶴樹

ままごととに蔭膳据える女の子

評 ままごとと思はぬ自分の家の内膳事をしやべつてゐる子を見る事があるが、子供は我等の鏡、何でもうつる、この子のお母さんが判つて嬉しい。

小樽 平井 善慈

月出て目立つ轍の雪濁り

評 月出て目立つ轍の雪濁り、受話機とる耳に時計が邪魔になり

草戸町 佐藤 弘人

山門の筆蹟顔で眞似て見る

評 敵軍を呑む氣配あり鯉のぼり

北海道 花田 順往

神田區 宮本 一

洋傘の先雨雨と書き

大阪 小林 愚樂

床に置く靈芝食ひそな畫のたるま

福岡縣 丸山 千秋

桃咲いて遍路の足をとどめけり

大分 蘆 應喜

もたいなしわがため彌陀の立ちつ

小石川 金井 花

棒落つ我郷愁のしきりなる

向島 梅岡 元枝

慰める様に仔犬へ仔犬來る

鳥山町 萬壽 云海

今更に思ひ返して何になる

川柳家はものの判つた心の結れたヲヂさんで無ければならぬ、同情に富み、他に寔に、自を嚴、第六感は年中研ぎすまされ「素」の個性はいつでも自然に對してあの「驚き」を持たねばならぬ。川柳は何のために創るか、自己を完成さす爲めである。完成された人格からはじめてよき川柳が生れる。俳句と川柳の差は作者の心構へにあつて、句の上に無い。

投稿規定

はがきに一回句數に制限なし「淨土」編輯部柳壇係あてに送ること。

三島 鬼屋子

うたひとつもちおることのつよ

東 信太郎

鉛筆の芯とがらせておこるまい

村瀬 小萩

舟の子が舟に歸つて旗日暮れ

川上 三太郎

子供は風の子天の子地の子

井上 信子

櫻散る木肌に芽吹く明日があり

三村 叱咤郎

人の夜に涙の谷の底暗し

堀元 敦太

僧二人議論しさうで無言に居

竹田 花川 惘

春めいてまづ換から修めなり

河柳 雨吉

梅の樹の影ふむ影の着影れて

岩井 四塊

親指の爪も爪だがスフの足袋

同 人

廻覽板堅いどつかの御飯粒

西田 史朗

激情をおさへた夜の吸取紙

八十島 勇魚

クリークに幾度濡れし勝守

三條 東洋 樹

思ふ人あれば獨りの部屋を愛す

山田 鬼石

按摩する影も大きく春の壁

釜永 隆 國

石を蹴ることもひとりになつてゐる

魅つた人の話

(八丈島奇聞)

館林善導寺 石井英亮

昨年十一月、久しぶりで八丈島へ参りました。かつて管長親下よりの任命で伊豆七島を教化したことがありましたが、その當時から最も縁故の深いのがこの八丈島で、まるで第二の故郷のやうに思はれるところです。海上時化に逢ひまして一時ハブ港に避難いたしたりしましたが、十四日無事に大賀郷に上陸、同島五ヶ村の各寺壇徒總代、婦人會村長、學校長、警察署長等各位のお出迎ひをうけて一先づ同村宗福寺に入りました。同寺をふり出しに全島を巡教致しましたが、當時、信徒を始め同島の皆様がたの一方ならぬ御後援によつて無事にこの行を済めることが出来ましたのは、まことに感謝に堪へないところであります。

その巡教中に見聞いたしたことで、大變に心を動かしたところがありますのでそれを話したいませう。八丈島五ヶ村の、三つ根村といふ村に昔からの家柄で小宮山家と云ふのがあります。現在の主人公は夫を愼次、妻をさかえさんと云はれる。この御兩人はまことに篤信の方で、先年中も館林の善導寺へ参拜され、私から假得度を得て改名まで授與したことのあつた人ですが、その家で極く最近實際にあつた話であります。その御夫妻の長女で、みといと云はれる方(夫は現に大賀郷村の小學校長で小宮山才治氏であります)は結婚後、昭和十一年六月、流産をされたのが基で、藥石效なく遂に卅二歳の若さでこの世をば去られてしまひました。その亡なれたのが六月の十五日、家族は申すにおよばず、親籍一同は悲歎やるかたなく、十六、十七日の兩日は念佛にくれ、念佛

五月の風

飯田 光明

その日――

雲は門火の煙にも似てゐた
雨の日 風の日 この丘に眠り給ふて――

惠覺妙諦大姉 位

私はちいつと墓標を仰いだ

頭上 ひよう／＼と風になるもと

白い日

ひつそりと息をのみ

想念はきゝ耳をたてゝ静寂を愛した

臉を閉ぢた中に氣流はピンクの色となり

ひた／＼と全身に迫る蒼い感觸――

さつきから私は、魂のとゞろきを見てゐた

この嫩草の萌えきつた下から

高い松たちの梢から

にあけ、さて葬儀の日取や準備の相談などをはじめました。

ところがその十七日に、一つたん死んだみとしさんが突然、甦つたのであります。死んだと思つてをつたみとしさんが突然生きかへつて、床の上におきあがつたので、居合せて佛に回向してをりました一同の驚きは想像にあまりがあります。しかもそのみとしさんの容貌は一度死んだ人とは思へない程生々として歡喜にみちてゐるのです。

そして驚き且つはよろこびに踊つてゐる一同を前において、次のやうに語つたのであります。「皆さまが一心に念佛相續して下さいましたお蔭で、私はこうして甦ることが出来たのです。息絶えてをりました間中、私は極樂淨土へ參つてをつたのです。生きてをりました間中、未來こそ大事であると存じて一心不亂にお念佛を相續いたしてをりましたが、その甲斐があつたものか、息が絶えると同時に佛さまのおみちびきで、極樂を隅から隅までをがませて頂きました。實に言葉で申し上

ることも出来ないほど結構なところでございます。私は人は死ねば必ず佛さまのお膝下に參ることが出来ると云ふ確信を得たのでございます。私がいま生きかへることが出来ましたのは、皆さまにこの確信を傳へるやうにとの佛さまのおぼしめしであらうと存じます。どうぞ皆さまも一心にお念佛申して下さいまするやうお願い申上ます」と落付いた態度で云はれて、一同と水さかづきをされて、再び大往生をとげられたのが、十七日の午後四時でありました。

かくの如く何らの苦痛もなく、むしろ歡喜踊躍して往生の素懷をとげられることの出来たのは實に日頃の念佛相續のおかげであると私もこの話しを承つてまことに感激いたしましたのであります。

因みに同女の法名は以前、私が同地巡教のみぎり乞はるゝまゝに授與した「光融院攝譽正念妙澄大姉」であります。

香料よ 温かい湯氣となつて湧き上り
漫陀羅華よ 美はしく五色に映えて雨と
降れ
濃務のやうに この一坪をおし包んで久
遠に消ゆるな

私はまぶしい斜光の中に眸をひらいた

匂ひ濃きふるさとの風よ

花をわたつて咽ぶ風よ

茂みはるかにつんざき

梢近くに戯れるこゑ

あれは私を呼ぶ母の切ない叫びであるか

これはまた

母戀ひ鳥の愛にかつれた歌であるのか

こゝは恩愛越えたる丘 聖たちの住ふところだといふのに――

白い日

私はやはり静寂を愛した

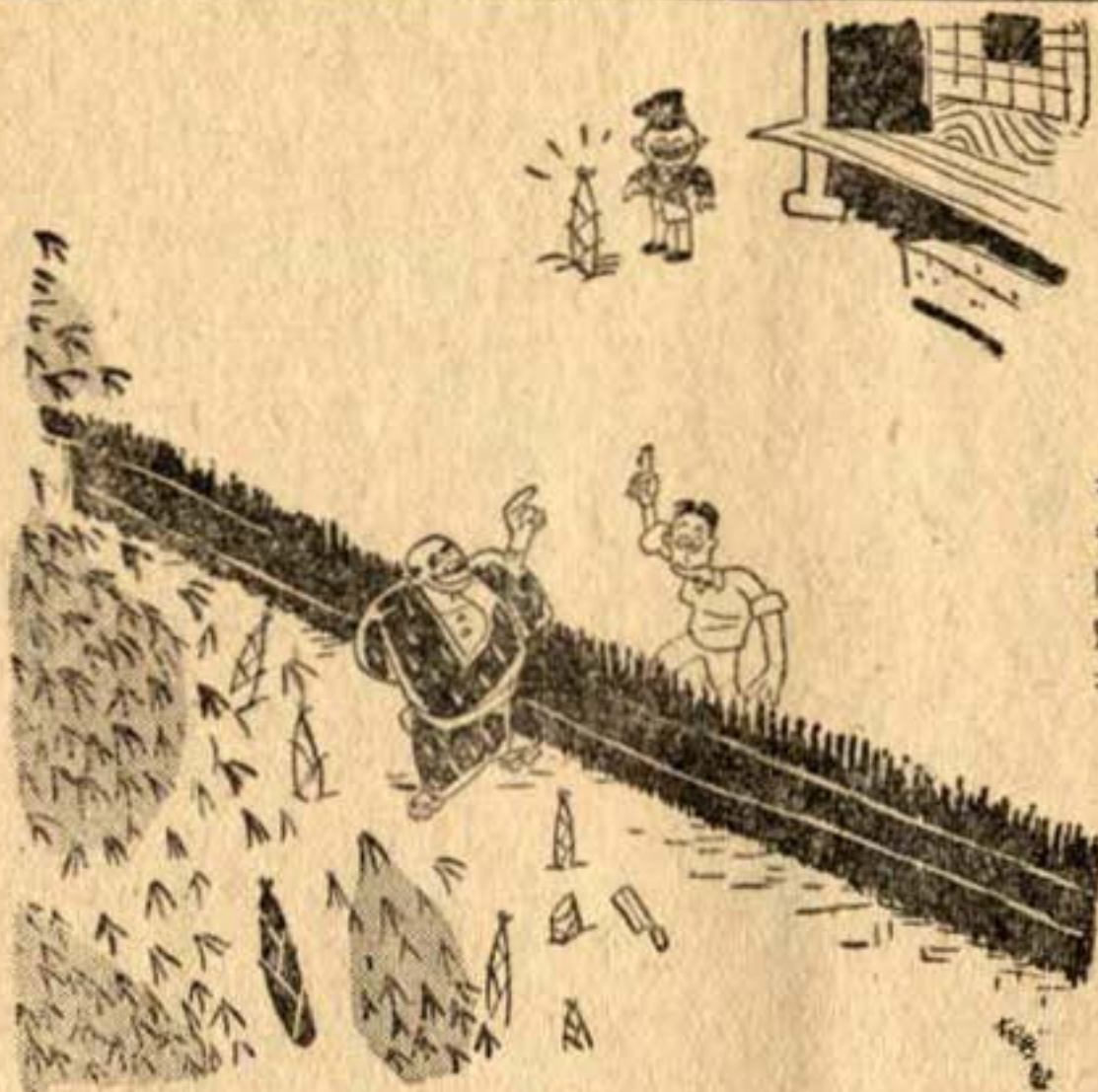
五月晴

東西南北

作 隊 画 漫 新

お隣の庭に出た筈

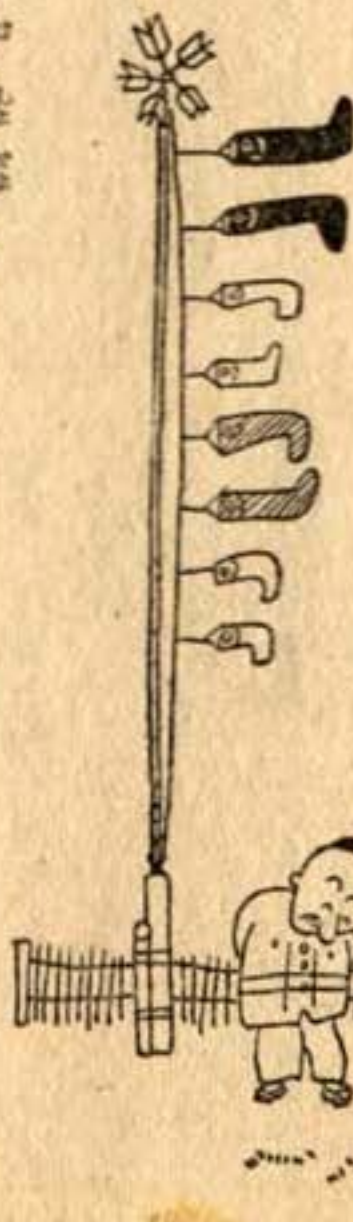
「ナニかまわん一つ味をみて下さい」
「こりや大家さん、すまんと思ふです」
をぎ原賢次



子置一家の
代用鯉幟

山崎善一

「僕の靴下は一番下ダネ」



夏場所迫る

川口久

「タハツ輪を踏んぢやつた
縁起でもねエでござんす」



KAWA
久

陸組の汐干狩

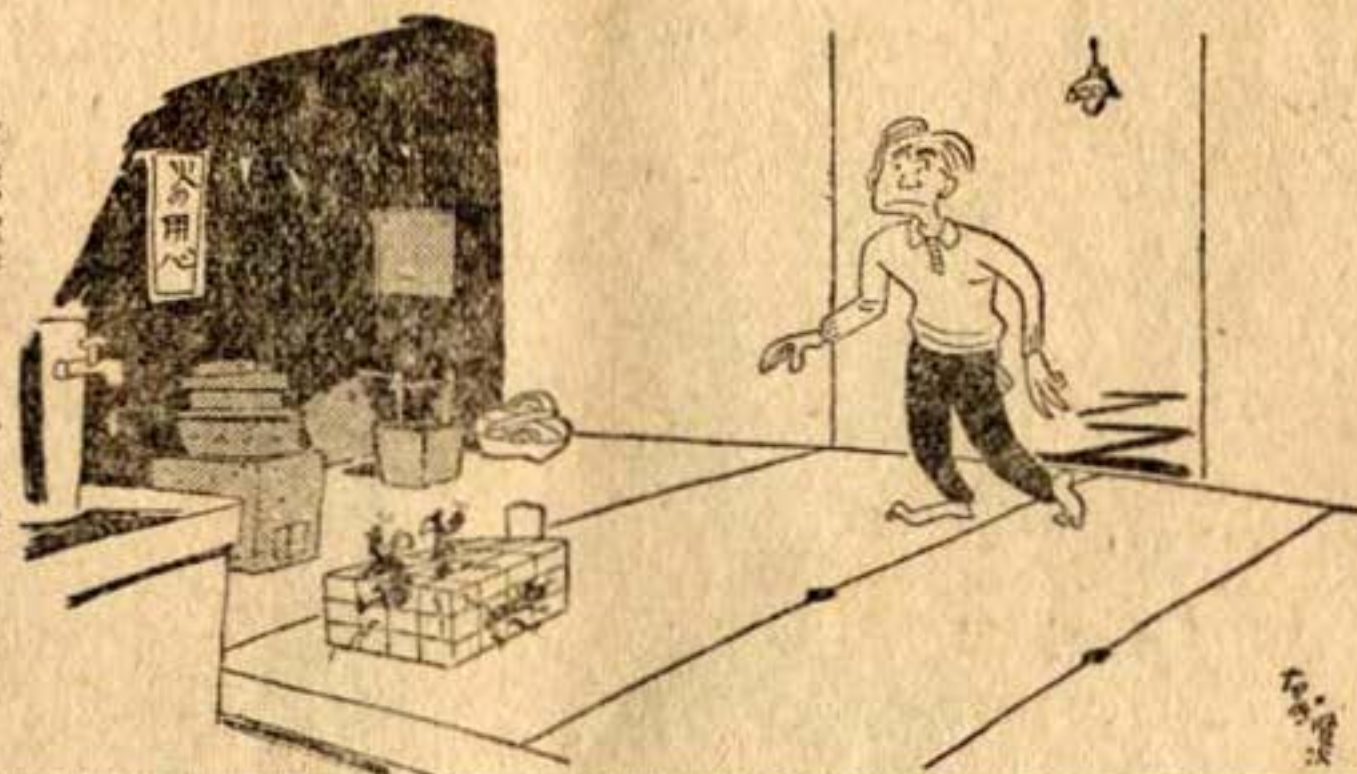
川口久

「顔が揃ふとつひ常會型に
なりますワイ！」



動物愛護デーの出来事
「ネズミ奴こんな時に限って
これだ！」

きぎ原賢次



ちきり

子煩悩科学者

山崎 善一



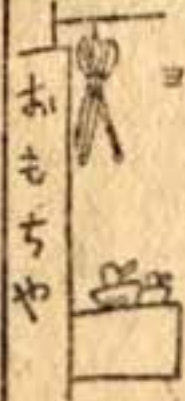
お父ちゃん
飛行機
を買った
でヨ

お父ちゃんまだア
もうイキ
だよ



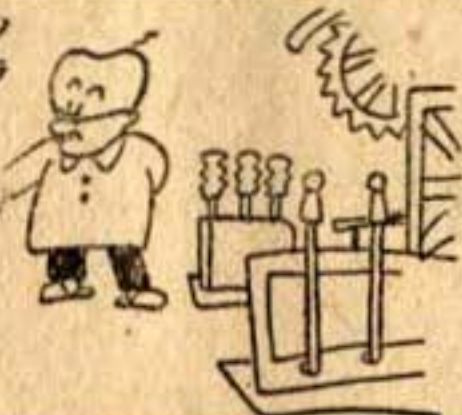
研究室

何だどれ
もこれも
古い
型だ



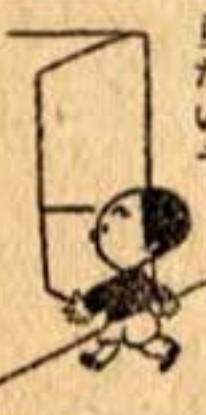
おもちゃ

家で強いのを
造つてあ
げる
から



ソラ
一番向

ふがロケット
次は殺人光線
こつちが地中
タンクだよ
そんなのつま
らないヤ





遺骨と兵隊

東 慈 道

砂煙りが焰のやうにもえあがる道を、荷車をひいたり、天秤棒をかついだりした兵隊が

あへぎあへぎ蜿蜒としてあるいてゆく。荷車や天秤棒には、椅子や鍋や水桶や毛布などのごたごたした世帯道具が、一ぱいつままれてゐる。草も木も強烈な太陽にしぼんでしまつてぼとぼとに乾いた道は、むんむんする熱氣とまうまうたる砂塵を理不盡にあびせかける。汗はからだぢゆうを漣のやうに流れて、拭いても拭いてもばたりばたりと落ちる。落ちた汗はじゆうと乾ききつた道に一瞬のうちにすいとまれて、あとかたものこさない。ともすればひよろひよろ倒れさうになるのを、じつところへて、私はがむしやらに車をひいて行つた。

私たちは南支の戦場にきて、まだ十日となつた。あなかつた。パイアス灣に敵前上陸した一部隊の補充員として廣東に上陸すると、たゞちに配屬されてゐる部隊の宿营地村にむかつて行軍した。しかし、到着してみたら、部隊は大討伐に出てゐるあとで、宿營してゐる人里はなれた山間の校舎は、がらんどうであつた。留守をまもつてゐる兵隊はかぞへるくらゐで、それもほとんど病人ばかり、死のやうな静けさがどの校舎にもたちこめてゐた。部隊が歸つてこなければ、働かうにも仕事がないので、今のうちにうんと骨やすみしとけといふ古兵を相手に、なすこともない退屈な不自由な生活が、私たちのあひだにはじまつた。

部隊の假りの宿营地であつたから、なにも
 かも足りないものばかりだつた。アンペラを
 しいただけのコンクリートが寢臺であつ
 た。暑い南支であつても身體は冷えて、
 三度も四度も小便に起きた。近所の島か
 らとつて來た、半分枯れてゐる菜つばや
 くさりかけてゐる芋が大切な副食物で、
 きたない谷川の水でたいた支那米の飯は
 何時も蠅でまつ黒であつた。大半のものは
 すぐ下痢をはじめた。夜になれば、石
 油も蠟燭も不足で、手さぐりで用をなさ
 なければならなかつた。内地で聞いたたり
 聞いたりして、誇大に想像してゐた戦地
 の困苦缺乏の生活にくらぶれば、上々の
 部類にはいるものであつたが、内地の不
 自由のない生活から一舉にはふりこまれ
 たので、全く原始的なひどい生活に思は
 れた。殊に山上に立つて、奇妙な支那の
 民家が點々と散らばつてゐる、見なれぬ
 飄渺たる平野を見下す時などは、どんな
 めにあつても決して愕かない固く決意し



ものが心の片隅に生じ、しだいにからだちゆ
 うにひろがつてゆくのを感ずるのであつた。
 不覺といへば不覺である。だが、内地で想像
 してゐた戦地がたあいもないものであつてみ
 れば、無理からぬことであつた。誇張して考
 へてゐた戦地の困窮な生活も、現實のまへに
 は一顧の價もなく、はじめて體驗する戦地の
 生活に、身をかまれるばかりであつた。
 しかし、この動揺した氣持も、皎々たる月
 光の下で古兵から戦闘の話しを聞く時だけは
 しづめられた。月は實に明るかつた。かはき
 きつた空氣にすごいほど牙えかへつて、その
 蒼じろい光りは、まぶしいほど目を射た。山
 も校舎も麓の島も、澄みきつた湖水の中に眠
 つてゐるかのやうに、燦々とふる銀の雪を靜
 かに浴びてゐた。私たちは毎晩、くらしい部屋
 をぬけ出して、晝のやうに明るい外に出た。
 手紙を書くものもあつたが、大ていの者は古
 兵に戦闘の話しをねだつた。支那の椅子によ
 りかゝつて淡々と語る古兵の顔は一きは蒼じ
 るく浮び出てゐたが、微塵も動揺のかけはな

かつた。じつと耳を傾けてゐると、しだいに彼等の逞ましい、びくともしない精神力と生活力にひきいれられてゆく。いくどか死をふみこえてきた彼等には、どんな窮乏な生活にも勝てるだけの餘裕ができてゐる。いや生活どころか生死さへ眼中にないのである。その不敵の面魂がびしびしと私たちをうつ。と、ともに大きな魅力を感じさせる。そして、不自由な生活に慣れたり、淋しがつたりした私たちがはづかしく思はれるのであつた。

『いくら戦闘の話しをしても、彈丸の下を一度くよつてみないことには、ほんとにわかるもんぢやない』

結びの言葉はいつもかうであつた。崇高なあきらめに貫かれた彼等の態度なり、考方なりが、かうして動揺した私たちの心を、徐々にであさるが鎖めていつた。

こんな生活が五六日つゞいた或

日、私たちは突然移動命令を受け取つた。討伐は既に終つて、部隊の大部分は廣東郊外の××××に集結してゐるから、直ちにそこに移動しろといふ命令だつた。

『こゝよりはぐつといふぞ、こんな山とちがつて、廣東の近くだからな』

『いや、いゝどころの騒ぎぢやない、宮殿のやうな立派なところだ。行つてみてびつくりするぞ』

××××からやつて來た兵隊たちが、引越しの準備をしながら、しきりに話してくれた。私たちは黙々として荷造りをしてゐたが、好奇的な感情が湧いて來て、いそいそとなるのであつた。

『ひととこに長くゐないからな……。ちやんと立派な宿營の準備をしてゐても、三四日でおさらばすることは、さらなんだ。とにかく軍隊の命令は急でね……。』

古參の上等兵は慣れない移動に轉手古舞してゐる私たちに、さとすやうに言つた。

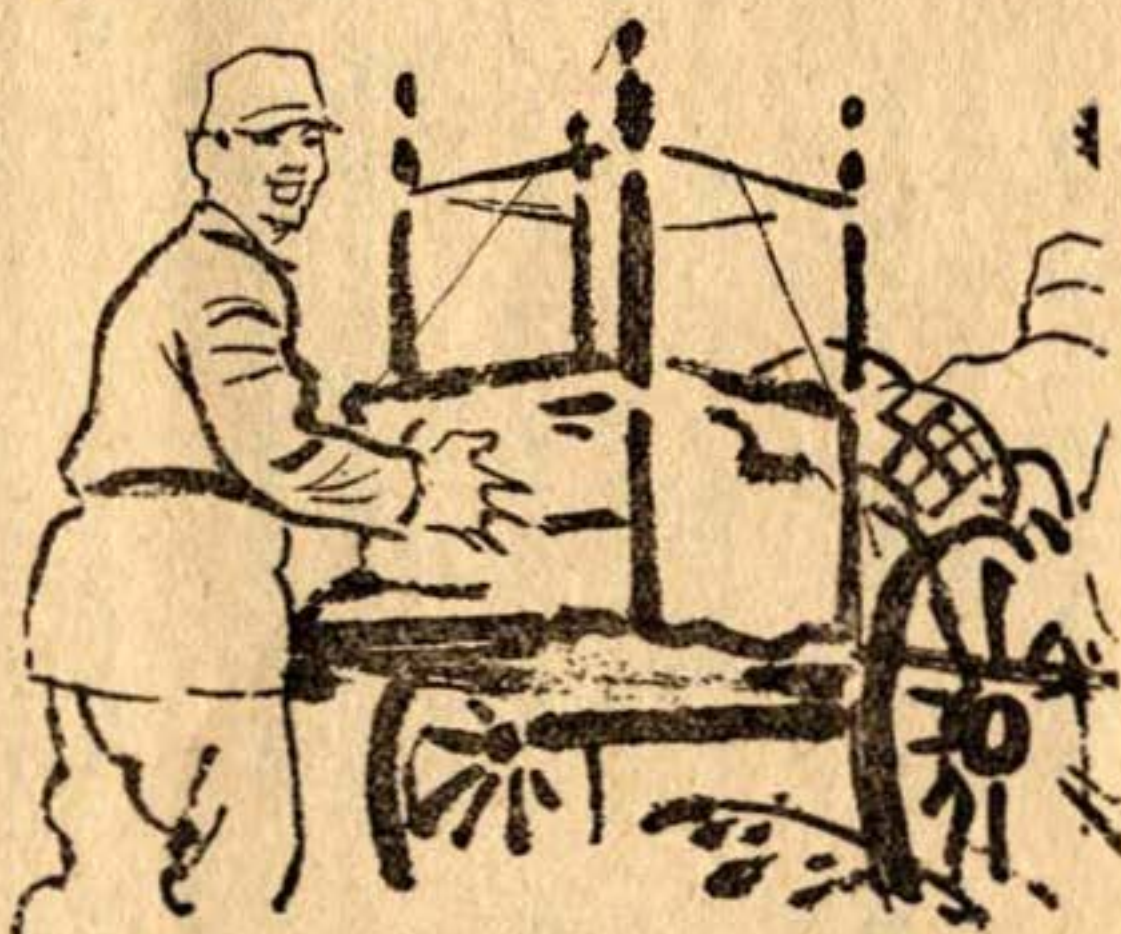
かうして私たちは山間の宿營地を、落着くまもなく別れたのであつた。大きな荷物はトラックで送つたが、小さな荷物はめいめい荷車や天秤棒で運びながら……。

汗だくなつて一里ばかり歩いたら各隊ごとにぼつぼつ小休止をはじめ



た。私たちの隊も樹蔭をえらんで休んだ。私は車をすてるが早いところりとところがつた。急に汗が背中にあふき出てさあつと流れた。顔には油汗がじつとりじんでゐる。目がくらむやうである。一里ばかりの行軍でとは思ふが、南支の猛暑と、はじめて経験した荷車ひきとは、からだに相當にこたへたらしい。戦地だ、こんなことではこれから先が思ひやられるぞ、しつかりしろとはげまして、晴れあがつた蒼い高い空をじいつと見た。

あしは



『ほほう、えらいものを持つてゆくのか』
私のそばにゐた古参の上等兵が突然叫んだ。

『ふふ、愛惜の品ぢやからのう』
紫檀の立派な椅子を積んだ荷車をひいてゆく荷の兵隊が、前を通る隊の中から笑ひながら答へた。

出発の號令に飛び起きた。腕や顔が鹽をふいてさらさらである。まうまうたる砂塵を浴びて、また行軍がつづけられてゆく。

彈丸で廢墟と化した小さな町を通り抜けてかなり廣い村道に出る。はげしい往來にふみかためられた固い道である。兩側にはなんの興味もない畠がひろがつてゐる。道に近く所所に民家が見えるが、きまつて大きな熱帯性

の潤葉樹にとりかこまれてゐる。道に面して一寸洒落れた家があつた。入口の兩側に赤い地に緑り色で茶亭と書かれた板がかゝつてゐて、その前に石造りのテーブルと腰かけがしつらへてゐる。日本の茶店といつたところらしいが、人もゐなければ、道具もない。戦争前には支那人がのんきにお茶など飲んで遊んでゐた所であらう。

暫く歩くと、横道にはいつた。土の香りがする新しい道である。ほこほこの赤土で、軍靴が赤黄色の粉をふく。小さな川をわたる。川では兵隊たちが馬を洗つてゐる。この近くに駐屯してゐる隊

の兵らしい。道は兩側に小さな木の生えてゐる丘にはいつた。坂にかゝつた道の片側に燃えのこつた自動車が残骸をつゝこんでゐる。その下にはほとんど形をとめない死骸がころがつてゐる。丘を越えてしまふと、アスファルトの廣い道に出た。並木のある堂々たる道である。その道をすこし歩いて、また横道

に折れる。相變らずの赤ちやけた道であるが、小さな丘を横切つてゐる。丘を上りきると、眺望がひらけた。なんにもない水田がひろびろとひらけて、この道のつゞきがその真中を白く縫つてゐる。そしてその道の盡きたところ、こんもりした森が見える。はじめて歩く支那の道だ、目につくものが悉く珍らしい。

『あの森だ、あの中に學校があるんだ』

誰か叫んだ。急にみんな元氣を出して、歩調をはやめた。

— 三 —

なるほど學校は立派だつた。大きな正門をくゞつて校舎に達するまでに、大木の茂つてゐる山を越えねばならなかつた。如何にもゆつたりとした作りである。四方山にかこまれた谷底みたいな所に、小さな川が作られてゐて、赤い美しい橋がかけられ、兩側には並木に飾られた舗道があつて、所々にコンクリート造りのベンチがおかれてゐる。舗道につゞ

いて芝生の庭があり、その庭に面して、そりかへつた青い屋根に赤い壁のコンクリート作りの校舎が、づらりと建つてゐる。幾棟あるか分らないが、同じ構造の三階だての美しい校舎が、妍を競つてならんでゐるところは、實に壯觀である。しかも、四方の山にも大きな道が通じてあつて、同じ作りの校舎がそびえてゐる。一つの山毎に文學部とか農學部とかの單科大學を形作つてゐるのである。全く我國では見られない、おとぎの宮殿のやうな綺麗な學校である。

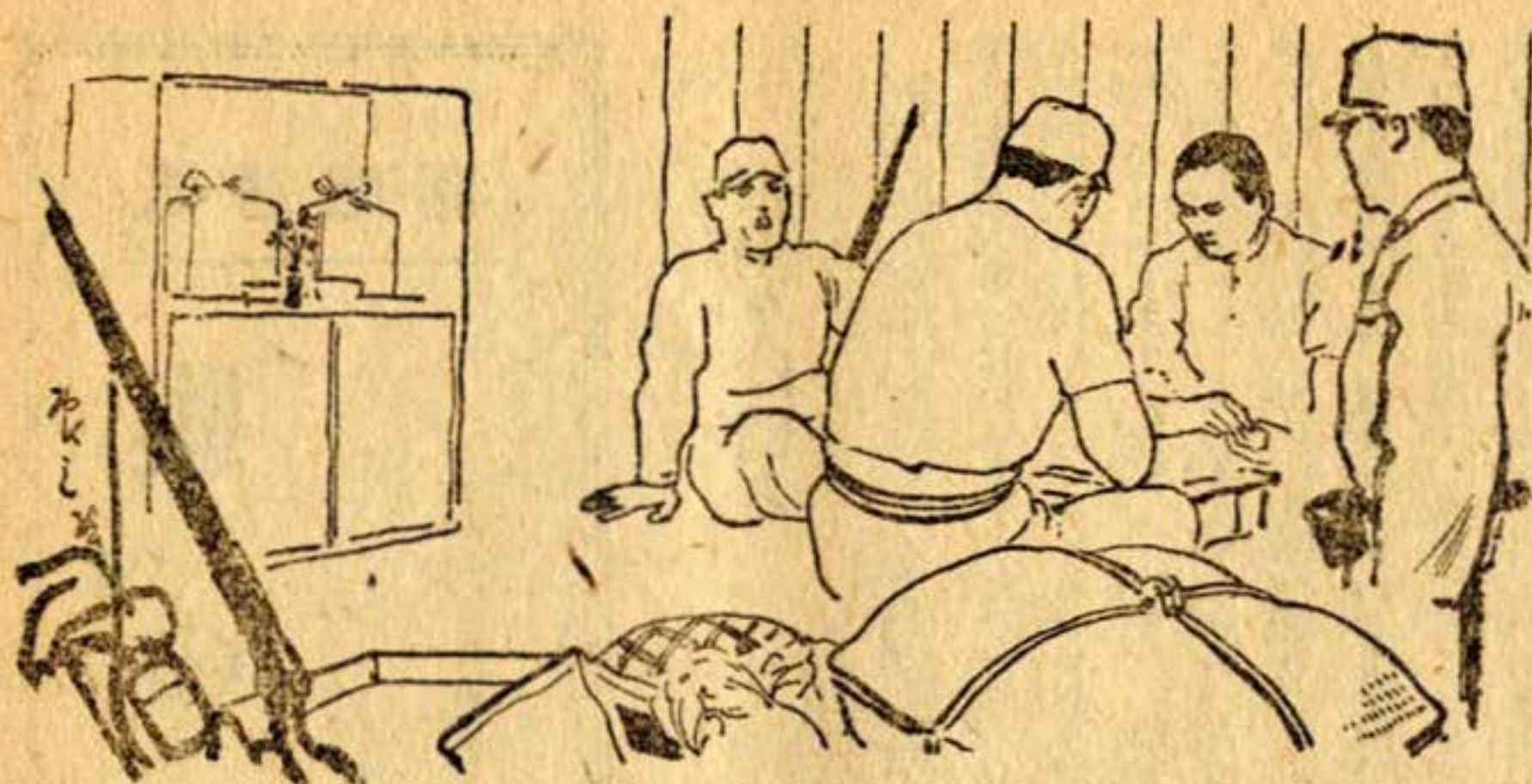
私たちは隊の配屬がきまるまで、長いこと孔子の祭つてゐる禮拜堂前の廣場に待たされた。禮拜堂は木造の、四方に勾配した屋根をいたゞいた大きな建物であつたが、それに向きあつて孫文の銅像が建つてゐた。眺望はよくきいて、遙るか彼方に、廣東の街がかすんで見えた。

夕方近くなつて、やつと配屬がきまつた。私は七八十名の者と一緒に、農學路と書かれた大きな坂道を上つて、山上の校舎に陣取つ

てゐる阿部隊に編入された。どの校舎も兵隊で一ぱいである。分隊別に別けられて四五人の同僚と校舎の中に入つた。入つてみて驚いた。外觀の美しいのに比らべて、内部の汚なさは言語道斷だつた。室内の設備は殆んどなく、がらんどろであつた。廊下には大小の荷物、物が雜然と積まれ、室内は寝るために急造の板ばりの床ではりめぐらされ、その隅に背囊や雜囊や小銃などがおかれてゐた。またドアの側などには、鍋や茶碗や薪などの炊事道具がところがつてをり、野菜や米などがつまれてゐた。或る部屋では、牛の足がだらりと下つてゐた。

私の配屬された分隊は一階の地下室みたいな暗い部屋にゐた。ドアをおしてはいると、中央に小さな通路があつて、その兩側に板ばりの床がはられ、その上で古兵ががやがや騒いでゐた。

『おは……お前たちか……來たのは……うんと働いてもらはうかの』
入口近くの床の上で將棋をさしてゐた兵隊



が、駒をもてあそびながら、じろつと見て言
つた。

『さしづめ、炊事だな』

相手の兵隊が紙の盤上を見ながら呟くやう
に言つた。私たちはドアの所でもちもちして
ゐた。

『自分のうちだ、遠慮せんで、ずーつとこつ
ちへ来い！』

奥の方で寝ころんで雑誌を讀んでゐた眞黒
な長い髭の兵隊が、起上りざま叫んだ。私た
ちはおづおづ進んで行つた。

『さしあたり炊事をやつてくれ。それから注
意しとくが、こゝにある遺骨には、毎朝必ず
水と飯のはつほを忘れんやうに供へてくれ。
いゝか……、わかつたか』

『わかりました』

私たちは指さされた遺骨の方を見ながら返
事をした。部屋のつきあたり戸棚が置いて
あつて、その中に二つの遺骨が安置されてゐ
た。花も供へてあれば、水も供へてある。亂
雑な部屋の中で、これだけは綺麗に整頓され

てゐる。亡き戦友に對する側々の友情が、戸
棚の中一面に漂つてゐる。私は思はず頭をた
れた。そしてなにか安心しきつた、どつしり
したものが、からだの中に充ちてくるのを感じ
た。

私たちは自分の品物をかたづけ、明朝の
炊事の用意をはじめた。私は薪を探しに出か
けた。二階の或る部屋に入ると、書籍や雑誌
が一ぱい積まれてゐた。いゝたきつけを見出
した喜びに夢中になつて、雑誌をかゝへきれ
ないほど抱いて歸つて來た。何氣なく二三冊
を手にとつてばらばらめくつてみたら、激烈
な抗日文字が大きな活字でべたべた列んでゐ
る。はあつと思つて、急いで次々に見た。ど
れもこれも抗日雑誌である。この學校が發行
所で、主に教授や學生等が執筆してゐるが、
中には蔣介石や亡くなつた胡漢民などの署名
した論文も載つてゐる。雑誌もあるが、事變
勃發後に發行された新しいのも、澤山ある。
私は讀んでゐるうちに、むかむかしてきた。

法語感話

腹
の
人

伊藤 宏 天

根浅きは倒る

外米は尙ほ巷間の話題であり、節米運動の手は未だゆるめてはいけないと思ひます。なぜ外米を食べねばならなくなつたのでせう。不作だつたからです。去年、一昨年。一昨年など内地全體としては、其うでも無かつたのですが、近畿以西、相當に旱害を蒙つたところが御座います。部分的ではありますが、私の村なども其のうちで、殊に門前にある七八反の寺領田は、全くひどい目にあつたので

す。晝夜を兼ねた作人の勞苦も及ばず、土は眞白にひゞわれて、伸びた稻草も葉はヨレヨレに、先から赤らみ枯れて行く、泣くにも泣けない有様です。出入の度に目のあたり、これを眺めてもろ共に悲しみましたが、或日のこと、表門を通ると突き當りが本堂、大抵のお寺は斯うした建て方がありますが、その本堂の裏手左右に續く森、大したものではないにしても、幾多の松や檜が育つて居ます。其れを仰いで、今更の如くに「ハッ」としました。一夏九旬の日でりに會つて、門前田畑の作物は今にも枯れやうとして居るのに、これ

は又何うしたとか。松や檜は、緑たゝえて依然として茂つて居る。而も、門前では作人が汗みづくの努力をして居るのに。そして、森の方には誰一人、桶に一ぱいの水も運んでやらないのに。此の差別は？

答ふるまでもなく根の相違です。

根浅きは倒る。

昭和九年の大風害で倒れた樹木を見た時に、痛切に叫んだ私ですが、再び、この實感を深めました。

何うしても根は深く養はねばなりません。

而も人は「心根」をネ。

常の時には、根の浅いのも深いのも、大した變りはないやうですが、あの年の如うな、非常な旱魃に出會つて見ると、根の浅いのは駄目でした。

非常時の聲、年を重ねて、つり行く一方です。心根の深き養ひ、今ぞ其の時では無いでせうか。

今、彌陀の本願に乗じて往生しなんに、願として成せずと云ふことあるべから

ず。本願に乗ずることは、信心の深きに
よるべし(御法語)
深き信心、深き心。何うしても心根を深く養

つて頂き度いものであります。
浄土を深信し、人生の飯趣を謬るべから
ざることを(浄土要誓五條)



善導大師の觀經疏には「決定して
深く信ず」と明されて居ります。
深き信心は正しき信心にして、且

つは又強き信心であります。

此の深き、正しき、強き信心
を、觀經の表では、單に、「深心」
と申します。深い心と書いてあり

ます。

繰り返す如うですが、門前田畑
の作物は根が浅かつたのです。本
堂に續く森の樹木は根が深いの
です。お寺の門前を通るだけで信
仰を云々する人がありはしますま
いか。門を通つて中庭にたゞずん
で居ても、矢張り信仰の妙味は解
りません。何うしても、堂奥に達
すると云ふ如うに、本堂に突入せね
ばなりません。堂に入つたか胸に

入つたか。ゴロの通ふ如うに意も又通しま
す。本堂につづく森の樹木は根が深かつた。

心根の音を通して心根と云つてもよいで
せう。極樂の七寶樹林が微風にそよぐ其の中
に、衆鳥の聲が五根五力の法を暢ぶと、阿彌
陀經に説いてありますが、其の五根五力の第
一位は、信根信力であります。信根深ければ
信力も又強いわけです。若存若亡、あるかな
きかの信すらも、時には他日の縁に成らうと
も、

本願に乗ずることは信心の深きによるべ
し

の御法語に基き、深き信心こそ望ましきもの
と存じます。

腹の人が大切

心根の浅きも深きも、常の時には解りませ
んが、イザ何事かに出會つて見ると、天地の
開きを生ずるものであります。私、幼時の思
出ですが、サーカスの猿芝居を見たことがあ



ります。何うして習つたものか、一かどの役者です。猿の心根など、見たくも見られぬ位です。お馬に乗つた殿さま猿に、太刀を持つてお供をする家來のお猿、仲々見事にやつて居ります。事さへ無ければ拍手喝采の内に幕となるのです。が、何うした間違ひか、其の舞臺へ柿の果が一つころがつて來ました。サー大ごとです。猿の心根マル出し、殿さまも家來もあつたものでは御座いません。太刀を放り出し、馬から飛び降り、お互ひに齒を向いて柿の果を奪ひ合ふ。芝居は破滅、お客は笑ふ。思はぬ劇中劇と云ふ有様ですが、相手がお猿だから此れでも

済まされませんが、人生社會では其う簡單には済まされませぬ。猿の人まねと昔から云ひ習はしては居りますが、最近は一人の猿まねが有る如うに思へてなりませぬ。信が胸に入らぬからでせう。腹の人が少いからでせう。其のくせ時運の進みは教にしても學にして、人をして相當にわからせて居るのです。が、其れが見て解る、聞いて解るの程度で、謂ゆる「知的理解」の範圍を出でないものですから、もう一つ底力にならず、従つてイザと云ふ時のお役に立たぬのでは無いでせうか、今に始めぬ事ながら、訓練とか鍛練とか練成とか、心ある方面で力を入れて居るのは此の點をねらつてのことだと思ひます。即ち知的理解は頭の人、功利打算には好都合でせうが、時代的には不向です。新體制には合はぬ人です。胸に入つた腹の人が欲しいです。知的理解をさげすむわけではありませんが、其の基本である知的理解が、情意の上に練成されて、抜き難い底力、眞の人格力になつてこそと思ひます。お客に行つた。珍英が出さ

れた。甘さうだな。イヤ、甘いに違ひない。
 ○○堂の特産だもの。見たら解るサ。成程、
 見たよけども、甘いと解るには解つたが、本
 當の甘さが解らない。本當の甘さは、食べて
 腹に入れてこそ。返せと云はれても返せな
 い。これが胴に入つたと云ふものでありま
 す。云ふは易い。然し仲々ムツカシイ。

私、近くの町で、十七年も前から、○○會
 と名けて、中小商業人の集ひを開き、強い根
 深い信心の養ひにつとめて來た。年と共に會
 員も、追々、育つて呉れたと思つて居ました
 のに、昨年の春、久し振りに懇談會を開いて
 見たら、

あゝして儲けた、斯うして儲けた

と、景氣の好い打ち明けばなし。私は耐りか
 ね、

「君たち、景氣の好い話をするが、其れは暗
 と云ふのでは無いか」

「ハア暗です」と平然と答へて居る。

「暗は危いのでは無いか」

「防空演習が度々で、暗は慣れて居ます」

話を横道へそらさうとする。まことに横着者
 です。

腹の人



を見ますヨ」

「然うだ。馬鹿を見るだらう、今時は、其の

馬鹿が必要なのだ。進んで馬鹿を見て

欲しいのだ。十七年の長期に互る信仰

教養は、斯うした非常時に、よろこん

で馬鹿を見る者であつてこそ、其の甲

斐ありと申すものである。信仰は頭で

は無い。腹である。腹の人、胴の人、

これで無ければお役には立ちませぬ。

此の節、利巧に立ち廻る賢い人は、恐

らくは、非國民的行狀の人である。

馬鹿な愛國者、利巧な非國民

敢て過言では無いと思ひます。勉強し

て馬鹿になれ。愚に還れ。

浄土の入門は愚痴に還つて往生を

求むる(御法語)

のが特色であります。往生とは「正道

邁進」に名けるのであります。利巧も

の邪道横行は、浄土の本意では無い。

又、國策にも反します。今からでも遅くは無

い。進んで馬鹿を見て欲しい」

「暗をやつてはいけなげ」

「今時、先生のやうな事を云つて居たら馬鹿

「其んな事云つたとて、世間が揺れて居ますから」

「腹が無いから揺れるのだ。胴が据らぬから揺れるのだ。腹を作れ胴を練れ。底に徹することが大事である。泥中に咲いた蓮華の喻もあります。」

本願に乗ずることは信心の深さによるべし

深き信心だに決定すれば、世間は如何に動揺しようとも、泥中の白蓮華、毅然として正道邁進出来やうものを。……」

せずには居れぬ心

二時間に亘る坐談説話、これとても、或は「知的理解」に墮しもやせんと恐れつつ。

偕てこれが何所まで効いたやら、おぼつかなくも思はれます。其の後、段々、規則もヤマシク、制裁もキビシイから、以前ほどの暗は出来すまいが、法網くぐる横着ものなら、やつてやれぬことも無からうと思ひます。

斯うなると、結局は、腹より外に道は御座

いません。田舎の人は、よく腹念佛と申します。其れは念佛會に出る供養物、其の餌につられて申す念佛のことではありますが、眞に文字通り腹念佛が望ましい。

頭の人と腹の人とは態度が違ひます。頭の方は「せねばならぬ」と申します。腹の方は「せずには居れぬ」と願ひます。

せねばならぬ心より、せずには居れぬ心まで

此れが本年初頭の私の試筆で御座います。

せねばならぬは不徹底です。弱いです。辛いです。年がら年中、せねばならぬで追はれ通しの方はお氣の毒です。重荷を負はされたやうで、厄介で、大層で、苦勞で、耐らぬでせう。

せずには居れぬ人は立派です。愉快です。元氣です。能率が上がります。人を動かします。天地にも感じます。小川正子さんの小島の春、大館康子さんの病院船、讀んだでせう。見たでせう。感じたでせう。泣いたでせう。

淨き友 信仰坐談會

一、日時 五月四日(第一日曜日)午後六時より十八日(第三日曜日)時より

一、會場 本郷區東片町七八橋本樂榮方

電話小石川四九七六番

一、講題 選擇本願念佛集

講師 中村辨康先生

どなた様も御來會下さい

淨き友の會幹事

う。

此れが、せねばならぬの弱い態度で出来る

ことでせうか。正子さんにしても、康子さんにしても、人類愛か祖國愛か燃え立つ信の底力、せずには居られなかつた聖業のあとづけです。だから讀む人が感じるのです。見る人が泣くのです。

元祖法然上人が七十五歳の老體で罪人の汚

名を着せられ乍ら、四國邊鄙へ流しものと云ふ時に、お弟子の面々、お師匠さまに苦勞もさせ度くなし、自分らも別れが辛い。よいすべもがなと工作をして見ると、「念佛の弘通をせぬ」とさへ、表面的にでも宣言して下されば、九條家あたりの取なしもあつて、何うやらお上の勘氣もゆれさうに思へるので、到々、弟子の法蓮房信空が進言を始めました。

すると
流刑さらに恨とすべからず、……いま事の縁によりて年來の本意をとげんこと、すこぶる朝恩とも云ふべし(勅傳三十三)と、有名なお言葉であります。然し、腹の出來ない弟子共には其のお心が解らない。其の一人、西阿が耐りかねて不満の聲を放つた。

すると、
汝、經釋の文を見ずや
と、厳しき御叱正であるにも拘はらず、經釋の文は然りと雖も、世間の機嫌をそんずるばかりなり
と、わからぬことを愚痴つて居る。何所まで

腰がきまらぬのだらう。先に「世間が揺れて居るから」と云つた連中と好一對に思はれます。其所で最後にいたよく法然上人の有名なお言葉が、

われたとひ死刑にをこなはるとも、この事ははずばあるべからず

であります。これが「せずには居れぬ」底力と申すのであります。而も、させて頂く身の幸福と、(すこぶる朝恩ともいふべし)歡喜法悦に進み得るのであります。せねばならぬ心より、せずには居れぬ心まで、更には、させて頂ける身の幸福と、三轉しての法悦生活こそ、心根の深く養はれた姿と思ひます。

(山崎善一畫)

(四五頁よりつづく)

そして、怒りが胸にこみあげてきて、たうとう我慢できず、部屋の隅にたふきつけてしまつた。だが、暫くすると、いゝ妙案を考へつた。思はず快心の微笑が口からもれた。私たちは、その翌朝、古兵が寝てゐるうち

に起き出て、裏の廣場で飯をたいた。まだまつ暗であつた。同僚の兵隊があちこちに四五人づゝかたまつて、やつぱり朝飯の仕度をしてゐた。

私は鍋の前に腰をおろして、燃える火にどんどん抗日文書をはふりこんだ。めらめらもえてゆくのが氣持よかつた。飯はしだいにたけてゆく。これで抗日のために斃れた遺骨にいゝ供養ができるぞ。私は愉快でならなかつた。

『おい、飯だ、食べてくれ』

私が胸はずませながら持つて行つたは、つばを、髯の兵隊がもぎとるやうにとつて、遺骨に供へながら言つた。生ける人に語るやうに情愛がこもつてゐた。他の古兵も丁寧に頭を下げた。私は胸が熱くなつた。烈しい戦友愛を感じて、心の中で泣いた。そして、これなら何時でも安心して死んでゆけるぞと、生死を超えたやうな、のびやかな心持になつた。動揺してゐた氣持がやつとしつかり定つたらしい。遺骨に心からの合掌を捧げた。

會員通信

天津

講話・紙芝居で賑った

大阪誌友會の催し

大阪教區教務所と大阪市淨土宗

青年聯盟等の肝入りで去る四月四

日午後六時半から大阪市天王寺區

生玉前町法音寺に於て大阪方面の

誌友會を開催しましたが、約四十

餘名の會員諸氏が集まり、先づ中

村辨康師の所感と題する講話があ

つてから、宗教紙芝居、座談會等

があつて同九時三十分和氣満々た

一水會の旅行

本會運動の實踐に或ひは會勢伸

大陸會員の活躍

齊々哈爾

張に直接援助をするために東京方面の少壯有力二十五氏を以て組織されてゐる一水會はこれまで毎月會合して本會事業について意見の交換を行ふ等のほかに各地で誌友會の開催、講演、座談等を行つて來ましたが、去る四月七・八兩日に亘り四月例会と旅行を兼ねて箱根にハイキングを試みました。

天津市天津寺阿部敬道師はかねてから天津同胞の間にあつて熱心にお念佛を擧められてゐましたが、また他方には本會の趣旨に深く賛同せられ種々本會のためにお骨折り下さり、同師紹介によつて本會に加入した新會員は僅かの間に二十名の多數に上つてゐます。

これまで齊々哈爾本會支部主任としてゐる／＼とお働き下さつてゐましたが、この程同支部の擴大を企圖せられ、會員募集に努力せられた結果三十名の新會員の獲得に成功し、同支部新會員として申込されました。

◇私は奇縁だと思ひました。昨年夏増上寺の境内で知友人と別れを惜しんで芝浦港より出征したあの日のこと、船上で皇居を遙かに拜み國歌を唱つて陛下の御馬前に死ぬ固い決心をしてからも多くの人の盛大なお見送りには忘れられぬ崇高な感激をおぼえました。その後不幸にして病のために還送されましたが、私が銃後に歸つて爲

本會々員濱松市田町小塚伊三郎氏は四月十四日日本部事務所を訪問され、同氏の經營になる共生會館維持費の餘剰金を本會事業費の一部にと金百圓の御寄附を申出られた。その他片岡廣子氏は金拾圓也、天津船橋そめ子氏は金五圓也を寄附されて本會の一層の發展を願はれた。

北滿齊々哈爾淨土宗教團今泉定順師はこ

さねばならぬ當然の分擔は何んであるかを毎日考へました。そして

「なんち等朕とうれひを共にせよ」

とあの御勅諭に答へる生活こそ減私奉公、一億一心の基であるとの貴い心に到達出来ました。村に還つて早速農業報國の推進運動に身をさしづけてゐます。私が病院での病床生活は幸ひでした。そこでお世話下された看護婦さんに一冊、心に悩みを持つ人に一冊、せめてのお禮のしるしに「淨土」を贈ることゝしました。(茨城県石崎村新興農場 藤咲達)

◇戦線で「淨土」を見るのは最も嬉しいものゝ一つです、精神的な力を養ひ、戦陣訓的要素を多分に持つものこそ「淨土」であると思ひます。個人としての修養は、やがて國家的、有能人的資材に役立

つことが出来るでせう。(北支、鈴木部隊 渡邊明道)

◇私の町に電氣治療を看板に怪しげな新購をなし大變評判になつてゐるものがある。彼は以前に一文葉子商を失敗して現在の商賣に轉向し、一昨々年のこと「何々新購所」の看板を掲げて警察の手入れがあり、それ以來は「電氣治療所」と看板を塗換へてゐる。そこに入してゐる人々は皆熱心で、「一回かゝつたら必ず治る」と云ひながら、二年も三年も通つてゐる人もある。また町の有力者で、しかも學歴もあり佛教信者である者までがこの怪しげな治療所に通つてゐる始末である。勿論人間の色々な弱點につけ込んで相當な繁榮をなしてゐるこの種のインチキ新購所の存在は許さるべきものでないに拘らず容易に絶えないものである

が、少なくとも佛教を信じる者だけには、こうした迷信を家庭から断然排除してゆきたいものである。あれがよいと云へばあれを、これがよいと云へばこれをと迷ふ浮草的な人生を過してゐるのでは餘りにも情けないことである。(東北、一讀者)

◇久し振りに「淨土」を拜見いたし誠に有難く、戦場勤務の餘暇に親しく御法話にふれ云ひしれぬ悦びを感じることが出来ました。會員各位殿の御健勝を祈ります。(中支派遣軍松竹部隊榎本靈心)

◇往生はやすしむづかし世の人のまこと心のあるかなしかで阿彌陀佛と申すより他にすべのなき身にふさはしき御法たふとやあますなき法のみ言葉聞かざれば迷ひのやみの果しなからん浅き身に深く求めて法の道さがし

あてたるまことひとつを
(名古屋市 拜佛生)

◇本誌三月號の信仰相談に「追善供養」につき誠に親切なる御解答があり有難く拜讀いたしました。が、失禮ながら愚見を一言述べさせていただきます。大體回向は初七日より始まり七七日百ヶ日一周忌……等段々ありまして漸次功德を積むこと、即ち、その人の命日等に回向供養して念佛功を積み、例令念佛を申さざりし人も回向供養の功德により極樂に往生し、年次回向の功により地位を増進するのである。勿論自家の繁榮を守ることも得る。故に一度や二度の回向力が不足するに非ずして夫に功德を得ることは確實であるが、積重ねて積功累徳ならねば大成出来ないものである。(新潟縣村松町 廣保松隆)



孝譽上人と

春の詩

石井孝則

復び移る花影の、山
堂に到るを

(櫻寧邸舎詩、巻下)

二七

この詩の意味は、佛
燈の光りも油がなくな
つて、やうやく消えた
ころ、私は春のうつと

孝譽上人といへば知られぬ方もあらうが、
山下現有上人といへば知らぬ人はなからう。
しかし孝譽上人といつたはうが何か親しみが
感ぜられる。名のもつ不思議であらう。明治
大正、昭和を通じての高徳であつた上人の御
性格に就て、あれやこれやと述べるだけ勿體
ないことであるが、その御稟性の一面として

上人は傷心ふかき、詩魂の所有者であられ
た。そして上人は春の詩人である。實際に上
人は春を愛せられ、その詩は多く春の歡びを
歌はれてゐる。かうしたことが上人の御風格
に春のほうやりとした面持と、咲きさかつて
ある老木の櫻をその全體から想はしめ、その

花の散る下の御往生は一層にその印象を私に
は深くしたのである。昨年、新潟の相馬御風
氏から頂いた「念佛のこゑたえざらんみはか
べにちりかゝる春の花をこそ思へ」の歌は、
この春にあつて、ひとしほ上人へのなつかし
さを深くする。

上人の詩そのものに就ては、度々他の雜誌
に書いて來たので、こゝでは讀者と共に上人
の春の詩情を味ひたい。

春晩間吟

佛燈、膏盡きて、稍く光を消す

睡りに起きて、初めて是の夕陽を知る
羨むらくは、月明を殺して長く滅せず

りとした長閑さに、すこしうたゝ睡をしたや
うで、氣がつくと、夕陽が明るく私の居る部
屋にさし込んでゐる。夕陽も美しいが、はや
くから東の空にある月の明るさがそのために
失はれて、なか／＼没らないのは、うらやま
しいことである。それに、いままで庭に影し
てゐた櫻の花も、月が照り出してくれば、閑
雅ないい影を、山堂のあたりに見せてくれる
であらうに。といふのである。いかにも日本
畫を見るやうな典雅な風致であるが、この透
徹した觀照はどうであらう。こゝには寒山や
良寛の如き冥想はないが曇りなき感動と直感
がある。それが道を悟つた人の平靜な達觀と

落着きからきてゐることは、詩そのものがよく示してゐる。この詩のよきは轉句と結句の手堅い寫生である。殊にその主意が「羨殺月明長不滅」にあるため、結句を現在形「移る花影の」として「山堂に到るを」と「羨むらくは」に對して餘情餘韻を醸すべき讀みかたをしたほうがよからうと思ふ。次の名歌とともに鑑賞されたい。

このゆふべたとしへもなくしづかなり日は明らかに月を照らしぬ

賣花翁

辛苦何の得る所ぞ 幾歳か雪霜を護る

花を賣つて茅屋に歸れば 花却

つて畫堂に上る

花は應に這の翁を憐べし 幾

箇の錢か囊に入らん

(同、卷下二六)

幾年ものながい間、雪や霜にいたまないやうにと、その花が咲くまで、花賣りのお前は



如何に辛苦をしたことか。そしてそのてしほにかけた花も町に出ては賣つてしまはねばならぬ。しかし 花を賣つて貧しい我が家に歸

ればとて、哀しがることもなからう。花はお前に賣られてこそ、りつばな家敷の中で咲き誇るのである。そして長年大事に育てていた

だいたあなたが、私のためにどれ程の錢が財布のなかに入れられたらうと、花はお前をあはれみ、いとほしむでくれるであらう。

かういつた感懷を詠まれたものであるが、春の詩では私の最も好きな詩である。これは上人が「賣花翁」を見て詠まれたものでもなく「賣花翁」になつてみて詠まれたものでもない。嘗て上人はお居間の庭に、枇杷と梅と夏蜜柑の實を蒔かれて、長い年月の間、朝夕に水と與へられにんげんのやうにその成長を樂しまれたものであつた。上人は晩年、夏蜜柑が大變お好きで、その皮膚の色までが黄色味を帯びたほどであつた。夏蜜柑の木はそれだけに大事にされた。長年の末、枇杷と梅はその實を結び、美しい花を咲かせて上人のお目を樂しませた。しかし、夏蜜柑の木は實を結ぶのが遅く、青々とした葉の間からふつくらとした黄色い實が姿を見せかけた年にはすでに上人は床中の人となられてゐた。そして遂にご覽になることがなかつた。「花は應に這の翁を憐むべし」すくなくとも

私はかうした事實をこの詩から、この句から得たいと思ふのである。この詩は晩年のお作ではないが、その地味な生活感情は一貫して變るところはない。西行の詠んだ「花いかに我をあはれと思ふらん見て過ぎにけり春をかぞへて」は、まだ我が主になつてゐる。なりきれない深刻な悩みを訴へてゐる。それだけにこの悩みは美しい詩をつくつたのである。「賣花翁」はこの意味であまりにも高い境地と云はねばならぬ。

御参考に同題の一首を擧げて、讀者の清鑑を乞ふ。

「花を賣るは買ふよりも好し。一たび紫朱黄を擔し、行きては綺陌の裏を巡り、歸りては華樹の傍に宿す。縦ひ村巷に餓死すとも、猶能く墳土香しからん。」

春の詩として、他に忘れられぬ一首がある。詩風も、上人の個性といつたものが伺はれるから最後に出さして置く。

百花生ずるの日
雨飄へらず、風飄へらず。一天清し、百花

の朝。聯翩たる蝶は喜んで舞ひを成し、眠院たる鶯は鳴いて嬌を獻ず。
櫻は白く、雲に覆つて爛れんと欲し、桃は紅に、水に映じて嬌くが如し。
吟行、何れの處か尤も好き。四面の浮香、招くに似たり(櫻寧郵舍詩、卷下二八)

この六言律の意味は説明するまでもなく明白である。説明したりしてゐると却てわからなくなり、そのよさが感じられなくなる。四十歳頃のお作だけに實に生氣がある。春と一緒に躍り出したやうである。それでゐて淡々としたこの感懷はどうであらう。思つたまま感じたまゝを詠むといふことは歌にしる、句にしるやすいものではない。まして漢詩などといふものは、技巧上多くその「かさりつけ」に汲汲とするやうで、純朴率直な詩はまことに鮮いのである。上人の詩はその點、眞純な氣息がそのまゝ詩に現れてゐるために親しさが感ぜられぬといふことがない。これを孔子は「思無邪」といつた。或は「天真爛漫」と

云つてもよからう。「雨飄へらず風飄へらず。一天清し百花の朝」

全てがこの心であればと、いつも思ふことである。上人の詩集「櫻寧郵舍詩」の「寧」はこの靜寂な境地の極を云つたもので、それに「櫻れる」といふのだから、如何に謙遜の徳が深くあつたかおわかりにならう。これも單に寫生の詩でないことは、味讀されれば分るだらうと思ふ。

再び云ふ、人間としての上人、現佛としての上人が、最も端的に顯れてゐるのは、その詠まれた詩に於てである。そしてそより上人の境涯が了知出来るまでには、私達には百歳の年壽を假してもらつても到底到り難いであらう。しかし私達には忠實にそれを學びることが出来る。このことだけは私達の一生にいくら爲拔かれてもいゝ。

孝譽上人の八年の御忌にあたり、これが今迄の慈恩に酬い奉る萬分の一ともなれば私の悦びはこゝに盡きるものである。

(寫眞は故山下現有上人)



信仰相談

福業と功德とは

問

福業とは何ですか。また

た福業と功德との區別を簡単に御教示下さい

(門司 K・M 生)

答

福業とは罪業に對する言葉で「布施」「奉行」等を指して云ふのですが、後世段々「福」の思想が發達して六種の不同ありとするに至りました。眞の福は非常に高度の哲學的思辨の上に立つものでかの達磨が「無功德」と喝破したその思想の如き第四位の福業を標準にして言つて居るのです。今ま之れを申し上げますと非常に面倒になりますから略します。先づ一般の通念に従つて十善などを福業とお思ひになつて置いてよい

でせう。然しそれも有所得心で爲せば「福」が轉じて「罪」となると言ふことだけを御注意までに申し添へます。次に功德とは「功德福」の略で、善業をなすと、資潤利益の功能があるから「功」と云ひ、その人をして福利せしむる福德があるから「德」と云つたので、結局向ふへの働きを「功」と云ひ、こちらへの所得を「德」と云つたわけですから「福業」は「こと其のこと」を指して云ひ、その福業の働き又は結果を「功德」と云つたのだと御考へ下さればよろしいです。簡単に云ふことでしたから是れだけに止めて置きます。

手を叩いて念佛してもよいか

問

お念佛を鉢の替りに手を打ちながら拜むと、身心ともに歸依する氣

持になりますので、私は毎朝之を實行して居りますが、この手を叩きつゝ拜むことは

信仰相談

當 擔

中 村 辨 康

(迎 歡 問 質)

答

・大輪清

佛法に契ふことでせうか。また今の時勢に相應しいしかたではないでせうか。煩はしいことながら御尋ね致します。(栃木・島山)
お念佛を唱へるのには必ずしも木魚とか鉢とかを叩かなくともよろしいのですが、人間と云ふものは妙なもので身體を動かすと割合に心が動きませんので、木魚を叩いたり鉢を打ちなしたりするの



信仰相談

です。然し鉦の音は固いから耳に強く響く爲に、一般には多く木魚が用ひられます。尤も上總念佛は鉦と木魚とまぜて打つので有名になつて居り、且つそれは地方色と傳統とを持つて居りますから、特別な味ひもあることです。また山の中森の中などで一人で念佛する時は木魚よりも鉦の方がよろしいさうです。淋しさもまぎれ歌なども寄りつかぬと云ふことです。宮崎安右衛門と云ふ人はクリスチャンださうですが、桶の底を叩いて念佛したとかきいて居ります。何でもよろしいでせう。

我が國に於いては「木魚」の使用は徳川時代からと申してよいのですが「鉦」は大變古く奈良朝時代からあつたのです。尤も念佛に用ひたのは空也上人からだと言ひます。一説には智眞即ち一遍上人が弟子の一阿と共に賀茂の明神に參詣して念佛して居る内暴風雨になつたので、暫く休んで居ると鰐口が二つに割れてところがつて來

た。すると不思議なことに神主が二人の處へ來て「神の御告げである」と云つてそれを呉れたので二人はそれを叩いて念佛しながら諸國を遊行したのが鉦を念佛に用ひた初めてであると云ふ話があり、鹽尻九十六卷には松尾明神の鰐口は半面であるが、それは空也上人に神様が半面を與へたからであると云ふ傳説のあることを傳へて居ります。元來は雅樂に用ふる樂器であります。越王勾踐の造る所とも云ひ、それを我國で更に改造したとも云つて居ります。何れにせよ木魚よりもズツと古く念佛に用ひられたことだけは確かです。こんな譯ですから佛法の制に合ふとか合はぬとか云

ふことはありません。従つてかゝる鉦や木魚を使用しなくても差支へないわけです。手を打ちながら念佛せらるゝのもよいでせう。法然上人は「現世を過ぐべきやうは唯だ念佛の申されるのに都合のよいやうに」と云はれ、此外には「別の仔細候はず」ですから、あなたのようなやうになさいまし。然し私達の經驗から申せば木魚を叩きながら念佛するのが一番よいやうです。永がつゞきが致します。現在一般に廣く木魚が使はれて居るのは多數の人の多年の經驗からであつて、決して無視も出來ないものです。

靈魂の有無とその分裂は？

問

靈魂はあるものですか、無いものですか。亦た死亡の節は幾つかに、分れるものでせうか。例へば親類に不幸があつた時、たましいが飛んで來て知らせをするとか云ふことを聞きますが、そんな事

が本當にあるものでせうか。若しあるとすれば、その靈魂はあつちにもこつちにも行くのでせうか。私には不思議であります。御教示願ひます。(盛岡市・北山・佐々木興次郎)



信仰相談

答

佛教では凡てのものは

因縁に依つて結ばれて現象するのであつて、若しその結ばれが無

くなれば、それは自然に解體至すもので、人間の靈魂と云つたやうな固りは認めないのです。然しながら心の傾向に依つて日常の心の働きや行爲が度重なると、それが集積されて強い力を構成して行きます。それでその色々の業力の中で最も強い力が最も早く外へ働き出る潜勢力をもつことは當然な道理ですから、死後に於いて後の世を形作ることも疑へないのです。一般に「たましひ」と云はれて居るのは、この業力を指して居るものと考へます。

ありません。精神反應又は精神感應です。「死の知らせ」と云ふ話はよくきゝます。然かもその話は段々尾ひれがついて宣傳され段々復雜化して参りますので、充分注意して聞かないと、往々にしてあやまり易いのです。大體に於いてその「知らせ」のあつた時間は死後ではなく死の直前であることが事實らしいです。それで死ぬ人の突きつめた「思ひ」が影響するのではないかと云つて居ります。精神力が發信する時、感度の鋭敏なものがそれを受信し得るものでせう。一種の感應で

日常生活と不殺生戒との調和

問

私は想ひます。一切の生物は地水火風の調和に依つて生育されつゝ

あり、各個體は如何なるものも繁殖を要求しつゝあるが、とうに我々人類は色々な生物を糧とし犠牲として居るものです。全く一切の生物は互ひに闘争して勝利を得たものが生きて行けるやうです。法然上人の

す。例へば生きて居る者同士でも、心を通はせ得るもので、三間や五間ぐらゐ離れて居るところでは、眼で知らせる位のことは何でもありませんし、遠く離れて居ても親子とか戀人同士とかでは、夢に見合ふ位のこととはあり得るのではないでせうか。然しかう云つて問題は、假にそれが明瞭になつたところで、信仰には何の關係もないと思ひます。もしそれが信仰に關係があると思はれるのならば、その信仰は餘程程度の低いもので、もつと反省の必要があらうと思ひます。

「罪惡生死の凡夫」と云はれたのは尤だと思ひます。基督曰く罪の子我等は生れざる先より物の生命を奪はざれば我生命を持續する事能はずと、然るに何れの國も増々繁殖せしめんと獎勵しつゝあり、其の現實と佛敎の「一切衆生佛性あり」と云ふ大慈悲の不殺生の教とを如何に調和し理念とし

たらよろしいか御教示を乞ふ。(滋賀・甲賀・一佛教信者)

答

生物の生命を尊重し愛護すること
は、残忍な心を矯め愛憐の心情を

高めやうとするもので、一種の倫理教育であ

ります。物の命を殺すことは私達に残忍性を

與へ人間生活を完うする所以のものでないこ

とは申すまでもありません。然しながら一般

的に云つて動くものよりも動かないものの方

が、よしそれに命があるとしても、残忍な氣

持を養はないのですし、動くものにしても大

きいものよりも小さなものの方が軽く取り扱

はれて、是れ亦た残忍な氣持を助長いたしま

せん。また害の多いものをこらすことは害の

すくないものを殺すよりも、人々への残忍性

助長となりませんし、また家畜よりも野生動

物の方が軽く取り扱は

れて居ります。云はゞ

人間に近かければ近い

程、その命を取ること

は残忍的な氣持を養ふ

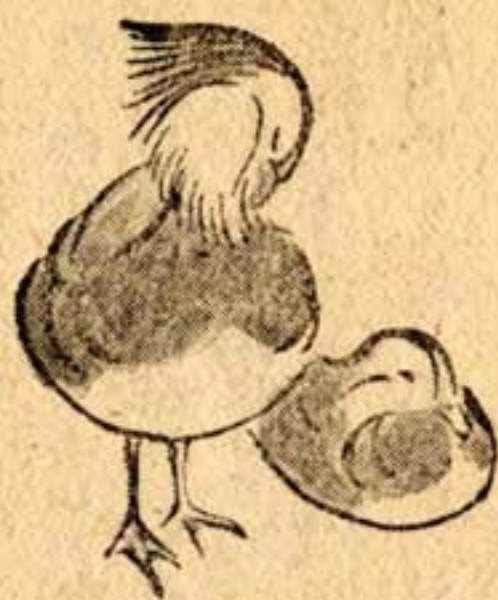


信仰相談

は残忍的な氣持を養ふ

もので、殺生を不可とする氣持はそれを指
して居るのです。だからこそ肉食よりも菜食
の方が残忍的でないと思はれて居るわけです
貴氏の云はれたやうなことは、私達も云つ
て居りますが、それは畢竟私達が反省する爲
の理論であつて、必ずしも宇宙の根本原理で
はありません。一方的な見方に過ぎないから
です。理論の上に立てば生物無生物の差はあ
りません。一切は一切に依存して居るので
す。依存しなければ一瞬と云へども生活する
ことは出来ません。此の依存は、一方的に見
れば犠牲であつて、この犠牲なしには一切の
ものは有り得ないのです。一切の諸現象は互
に犠牲になりつゝ、また犠牲を要求しつゝ存
在して居るのです。生物ばかりではないでは
ありませんか。ですから、無論犠牲を少くす
ることは結構なことで、出来るだけさうあり
たいのですが、犠牲なしには存在さへあり得
ない現實を見ると、少しでもより多く人
類、國家の御役に立つやうにしなければ忘恩
の徒であつて、誠に相すまぬ譯です。

かくの如く私達人類は他の生物無生物より
も道德的な理解を持ち得るのですが、更に一
歩を進めて之を宗教的に見るならば、實に廣
大無邊の設備を以て、私達をはぐくみ育て、
居る如來様の廣大無邊なるお慈悲に感泣すべ
きであつて、如來様は私達人類の爲めに、私
達人類を活かす爲に、一切を犠牲たらしめて
居て下さるのです。一切は如來様のおからだ
の一部分です。私達は如來様の御からだの一
部分を喰へ着て生きて居るのです。殺生と云
つても、元來「生命」とは或る一定の時間を
云つたものですから、その一定の與へられた
時間の存續を中斷する行爲を名付けて「殺生」
と云つたと云つて云へないこともありません
。して見れば時間を空費することとも一種の
殺生です。貴君が假りに一時間空費したとす
る時、貴君は貴君に最も近いものの「いの
ち」を一時間だけ殺したことになるではあり
ませんか。他の命どころかあなた自身のいの
ちをさへ殺して居るのです。問題をもうすこ
し深刻に考へて下さい。



法然御房に物を聽くの會

大 原 問 答

小 西 存 祐

一 まへをき

茲に、法然御房に物を聽くの會といふは、一般に大原問答、或は大原談義として傳へられてゐるものをさして言ふのである。以下私は、それについて少しく紹介を試みてみたいと思ふのであるが、その前に、尙ほ一言つけ加へて置きたいと思ふことがある。

夫れは今回の事變は、當面の武力戦の上にをいては、既に或る一つの階段に到達したものだと思はれるが、國際情勢の動向は、いつ何處で、どんな事態を惹起するにいたる

か、全く豫測を許さなまいといふのが、現下の實狀である。斯うした、謂はゞ底氣味のわるい氣流關係の裡にあつて、新東亞の建設といふ前代未だ嘗て聞いたことのない歴史的な大業を遂行して往かうといふことが、現在のわれわれ日本國民に課せられた天の使命であり、亦た榮譽でもある。

政府は之がために、謂はゆる「日本精神」のうへに足を踏んばつて、八紘一字の遠大な心構へのもとに、内外、物心の兩面にわたり、各種の統制を強調、一元化し、舉國一致、滅私奉公、堅忍持久の體制を整へて、着々と之が實現に邁進しつゝあるといふことは、夙にわれわれの熟知してゐる通りである。

二

夫れで、お互ひ國民たるものは、當然又この國策の線に順應して往かなければ成らないといふことは勿論で、我々は今や、立つてもゐても堪らないといつた、一種のあせり、氣味をさへ感ずるといふ始末である。中には「宗派」だとか「宗義」だなんていふものは、此際、何うでも可いではないかとさへ、頗る思切つたことを言放つものも有るやうであるが、私はそれは間違つてゐると思ふ。

是は譬へて言ふと、平生花嫁學校などで、作法なり行儀なりを習つてゐた者が、遽かに火事などいふ切迫した場面に出會はし、姫御前の在られもない、作法もへちまも有つたものでないと、言ひ放つと同様である。

勿論、さうした火急な場合、身まはりの物や臺所の器具などを、目八分、摺り足で運んでゐる者があつたとしたらそれは確かに、何うかしてゐる者であるに違ひない。然し平生、さうした修練をしてゐる所以は、いつ何んな場合に會はしても、落着いて隙間のない様に、進止動作の出來んがため、さうした切迫した火急の場合にこそ、却つて作法のほんたふの精神が、生きて働いてこなければならな

い筈である。宗派や宗義といふものも、また實に同様であると思ふ。

三

大體宗派といふものは、一方に、他の何物とも協調しうべき一面を持つてゐると同時に、他方には、他の何物も真似ることのできない獨自な一面を具へてゐなければならぬ。でなければ、宗派は宗派として、何等その存在の理由を持たないといふことになる。

然し又た宗派は、一方で爾うした性質を完全に具備してゐたとしても、若しその運用を誤つたり、或は充分でなかつたりして、従つてその機能が十全に發揮されないといふことになる、これ亦た實に厄介なものとなつてくる。世の中には、無くてはならないもので、實際また有つてはこまるといつた、實に矛盾したことがある。是はこの世の中のもの、何でもその機能が、充実に發揮されない、皆さうしたことに成つてくるので、財産然り、女房然り、子供も亦さうであるが、今の宗派の如きも、また實にその代表的なもの一つである。

四

元來「宗派」といふものは、元と宗祖の信仰を中心に結合された一つの精神的團體であることは、今更ら改めて言ふまでも無いことであるが、由來信仰といふものは、一つの活きた力で、何らそこに固定した形といふものを持つてゐない。例へば一つの誠が、君に對しては忠、親に對しては孝、朋友に對しては信といふ風に、對手のまに／＼にその形を表はして往く。即ち不定形である。

それで宗團といふものも、最初は大體、同じ宗祖の信仰を信仰してゐるといふ所から、自然に結合された單純なもので有つたのであるが、漸次その團體が擴大膨脹されてくると、最早や然うした素朴な形式では、全體の統制が採れないやうに成つてくる。

斯くして次には、その不定形な宗祖の信仰を思想化し具體化して、「宗義」といふものを設定するの必要に迫られてくる。宗義はすなはち宗祖の信念の「型」である。

處が夫れが更らに次の時代になると、唯だ宗祖の信念を具體化し、思想化したゞけでは、尙ほ不十分なことが感ぜられるやうになつてくる。そこで今度は、その一旦思想化

陸海軍慰問 雜誌 淨土

寄附者芳名 (敬稱略)

一圓二十錢 和歌山縣日高郡清川村 鈴木まさる
六圓二十錢 九州讀家養成所第二回卒業生 永田 眞榮

池田 顯碩
大庭 達城

山本 定龍

淺野 亮然

原島 深海

田中 卓二

福山仙太郎

藤井 かよ

武田清次郎

池田吉兵衛

二圓四十錢 天津日本租界浪速街善西里

三信洋行 船橋そめ子

誤植訂正

四月號發表慰問淨土寄附者御芳名中涯野正二氏とありますのは沼野正二氏の誤りにつき謹んで訂正いたします。

した宗義を更らに一段と具體化して「制度」といふものを作り、依つて以つて宗團の統制を計らなければならぬ時代が現れてくる。今日わが國にをける佛教の各宗派は、皆なそれで有る。

然し、さうした様に、活々とした信仰が先づ思想化され次いで又それが制度化されて、轉々それが「メカニカル」に變化してくるに従つて、宗門は一方に、その形が整つてくるといふことは事實であるが、それだけまた他方には形式化して、ほんたふの生命を失つてくると云ふことは、免がれ難い事實である。そこに色々な隙間が出来て、種々の弊害を伴つてくるといふことは、誠に止を得ないことではあるが、實際困つたことである。

彼の稱念上人の唱道にかゝる捨世派の一派は、源を茲に發し、又近時とかくの評ある光明主義の如きも、或る意味では、爾うした所から起つてゐると言ふことが出来る。

五

それで素直ほに道を求むる者は、衷心宗祖の信念に、全幅の歸敬を捧げながら、その宗團に對しては頗る飽足らない感情をもつて迎へるといふことになり、進んで血の氣の

多い連中は、宗團を呪つたり、打倒宗團を呼號したりするに至るのであるが、然し佛教が、ほんたうに佛教として行はれてゆくが爲めには、何らかの形で「宗派」といふものが出来なければならぬ譯で、従つて、宗派の獨自な性質を表はしてゐる宗義は、どこまでも保持されて往なかければならないことになる。坊主といふものを憎むのあまり、袈裟までも棄てゝしまふの愚を敢てしてはならないからである。

但し茲に、われ／＼の注意を怠つてはならないことがある。夫れは、その宗義を保持するにしても、前にも述べたがごとく花嫁學校の生徒式に、たゞ型ばかりに固執して「目八分」、「摺り足」の流儀では可けないといふことである。

即ち宗義は、その傳統の精神を傷つけない範圍において、能くその精神を吞こんで、それを時代に活用して往くといふことが大切である。

大原問答は、さうした意味で、宗義を活用してゆく上に、一つの良い範例を示してゐるので、已下私は、それを少し御紹介に及んでみたいと思ふのである。(つゞく)

編輯後記

◇家根の向ふに、或ひは森のかげに五月蟻の舞が腹一ぱいに風をはらんでゐる様は、見とれる位見事なものです。母親の兩腕に抱かれてゐてもさすがは男の子であると賞めてやりたい氣がします。「お前が大きくなつたなら決つとお國のために働くでせう」とお母さんの自慢げに見あげる目には涙が光つてゐることです。

◇生々とのびる季節になつて、高く明るく育たんとする力を感じます。又その反面には意識して緊張しないとかく情氣味になる時でもあります。

◇理窟だけはよく知つてゐて實行がそれに伴つてゆかないことは最も戒むべきです。それと同時にすぐそのまゝ實行に移し難いやう

な理窟も避ける必要があります。

◇この判り切つたことがらが仲判らぬ場合が多いので、先づ自分の足もとから整理してゆくことが難しいのも、他人のことがよく氣になるのもその例の一つです。

◇吉田絃二郎先生から大變お忙しい中を玉稿をいたゞきました。

◇大島徹水師の「弱い子どもたち」は、巨魁の同師がかつて格血した経験をお持ちであることを知り驚きました。

◇小西存祐氏から「法然御房に物を聴くの會」をいたゞきました。が、これは大原問答について連載下さるもの、序文であります。

◇増谷文雄氏の先師を語るは今度は行誼上人について述べられます。また道重信教上人について各方面からいろ／＼貴重なる資料をお寄せ下され、有難くお禮申し上げます。何れこの資料に基いて道重上人の分を補つて追加下さる豫

定です。勝手ながら今後ともお手もとにある近世高僧についての資料をお恵み下さるやう願ひます。

◇佐藤春夫先生は先般から脇の病ひに大部困られ、この月も休ませていたゞきました。

◇久し振りに眞野正順先生からと、また石井孝則氏から山下現存上人について玉稿を寄せられました。現存上人については詩について最も名があり、幸ひ京都の轉法輪寺から「櫻寧邸舍詩」が刊行されてゐますので、一言紹介かたがたおすゝめいたします。

◇住所變更の場合は舊住所も併せお知らせ下さい。

◇振替用紙の通信欄は十分に御利用下され、なるべく詳細な通信をいたゞきたいと存じてゐます。

◇廣告掲載については直接本會庶務部か、東京市京橋區銀座西六丁目正路喜社にお申込みなり、お問合せなりして下さい。

浄土 五月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和六年四月二十日印刷納本
昭和六年五月一日發行

(定價十二錢)

東京市芝區芝公園五號地一〇
編輯兼 眞野正順
發行人

東京市芝區芝公園十五號明照會館
印刷人 赤尾光雄

東京市牛込區板町七
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人遺仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「浄土」購讀規定

一部定價 金十二錢

◎ (送料五厘)

會費 金一圓二十錢

一ヶ年 (送料共)

知恩門主孝譽上人著

櫻寧邨舍詩

水町京子女史

（前略）眞善美の渾然とした世界、これは上人様の御心境の然らしむる處ではあるが、詩人としての優秀な力量に俟たねば到り難い處、私共の渴仰して已まぬ幽玄なるもの、清澄なるものが、こゝには磨きあげられた玉と照り、ふるれば心琴に通ふ韵きを成さうとしてまつてゐる。私共から漢詩を遠のかせてゐる一つのさはりとも言へる所謂白髮三千丈式の表現のないことも私共には嬉しいことである。優れた魂の聲を聴くといふことは、こよない人の世の悦びである。

岡本かの子女史——（前略）私が始めて上人の光顔に接した時は、心から救攝せられてゆく、えもいはれぬなごやかさを感じた。（中略）その詠まれた詩を拜見したときもこの感じはすこしも變らなかつた。いや、一生に變らないだらうと思つてゐる。

題辭

公 爵

徳川家達閣下

四六倍判 上下二卷 上製和裝帙入

序文

文學博士

狩野直喜先生

扉 孝譽上人肖像（寫眞）

序文

文學博士

内藤 虎先生

校字 大島徹水大僧正 價貳圓（送料共）

申込所 關通 轉 法輪寺

振替 京都 三七九一

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十六年四月廿日印刷納本 昭和十六年五月一日發行

淨 土 第七卷 第五號

（停）

定價 金十二錢（送料）
滿鮮臺等 金十三錢
外地定價 金十三錢